
IS-インフィニット・ストラatos-知識を求めるもの

rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S - インフィニット・ストラトス - 知識を求めるもの

【Zコード】

Z8257X

【作者名】

rei

【あらすじ】

世界にはそもそも不思議であふれでいる。

この世界で何かを証拠にして説明することはそれを否定する証拠にもなりうる

この世界に”絶対はない”

プロローグ

この世界には100%と0%は存在しない

誰が言った言葉かはわからないがその言葉は俺にとって衝撃的だった

この世界にはそもそも理論や常識がある

しかしその言葉はその理論や常識をただ受け入れていた俺にとって確実に変化をあたえた

そう

「絶対」なんてものはこの世界のどこにも存在しない

なぜならそれを定めたのもそれに縛られるのもすべて同じ人間なのだから

だから俺はあととあらゆる知識を吸収した

そして理解した

人間の定めた「絶対」を超えるにはなによりその「絶対」を知らない
ければならない

そんな生活をするよくなつてから2年

俺が6歳のとき

世界の「絶対」は覆された

「IS」「白騎士事件」

その一つは今までの世界を完全に塗り替えた

俺の両親はもともと軍関係の仕事をしていた

だが「IS」の登場により立場を失い母と一緒に自殺してこの世を
去った

それについて何か思うところがないわけではなかつたがそのときの
おれは両親の死よりもあらたに現れた「IS」についての興味でい

つぱいだった

既存の理論の壁をやすやすと越えるオーバーテクノロジーの塊
ぜひともそれについて触れたいと思つた

しかし問題があつた

そう「HS」は女性にしか使えなかつたのだ

それゆえに世界は女尊男卑の社会が浸透し、いつしかそれが当たり
前となつた

「HSが使えるのは女性だけ。ゆえに女性のほうが優れている」

それについても俺は特に思つといふはなかつた

世界がその傾向にあひつとも俺には関係ないからだ

だがその常識「HSが使えるのは女性だけ」という理論が「絶対」と信じて疑わない世界は気に入らなかつた

なぜありのまま受け入れる？

なぜ信じて疑わない？

なぜ？なぜ？なぜ？

だから俺は「HS」について学んだ

開発者 篠ノ之束の論文を読み存在しつるすべての「HS」に関する本を読んだ

そしてそのかいあって12歳にして「HS一級整備士」の資格を得ることができた

至上最年少での記録に興味をしめした倉技研の勧誘を受け俺は倉技研に所属することになった

そしてそれから2年、「HS」について研究開発をしそれが認められついには倉技研のHS部門総責任者まで上り詰めた

ほんとに俺みたいな年齢のやつに任せていのいか氣になるといひだ
がいいといつている以上気にしないことにした

そしてあるひ俺のもとに依頼が来た

「日本の代表候補生の専用機を作つてほしい」というものだった

俺達はすぐ製作に着手した

ベースとなるのは日本で今一番つかわれている「打鉄」と呼ばれる
量産機

仮の名称は「打鉄」式
それをもとで改良をすすめ専用機とするところになった

開発は順調だった

当初の予定より高性能な期待に仕上がる予定だった

だがそこで事件が起きた

なんと俺が「打鉄式」を起動させてしまったのだ

原因はわからない

いまでも「EIS」に触れる」とはあつたが起動させたのは初めて
だつた

「打鉄式」はすぐに「初期化」と「最適化」を完了させ俺の専用
機になつてしまつた

かくして俺は囮らすして世界の常識を覆したのだった

I.S学園入学（前書き）

作者のハートはガラスです

感想は歓迎ですがあまりきついと作者のハートが砕けてしまいます

IIS学園入学

おれがIISを起動させてから2ヶ月

俺はIIS学園に入学していた

もちろん俺の意思ではない

俺がIISを起動したのはすぐに日本政府に伝わった

それを知った日本政府は俺を保護の名目でIIS学園に入学させるとともに世界に”IISを動かせる男”として宣伝するつもりらしい
しかし自体は政府の思惑通りには行かなかつた

なぜなら俺は最年少の倉技研所属のIIS開発者であり簡単に異動はできなかつたからだ

俺はすでに開発者としての力は世界中の開発者の中では有名だつた

なにせ第三世代の技術といわれる”イメージインターフェース”的

開発者は俺なのだから

そんなわけで俺は IISにおいての発言権、影響力ともに政府のそれをしのいでいるのだった

そこで俺は IIS 学園に入学するときに条件をいくつ出した

- 1・学園内設備施設の自由使用
- 2・有事の際の独自行動の承認
- 3・学園の IIS 「打鉄」を一機譲渡する
- 4・授業中における行動への不干涉

以上4つを認めさせた

3つ目の IIS の譲渡は非常に渋ったが俺の開発した IIS のデータが取れるのならやむをえないとして泣く泣く認めた

かくして俺は IIS 学園に入学した

「私は副担任の山田真耶です。どうか皆さん、一年間よろしくお願
いしますね」

いま教壇のところに話をしているのは山田麻耶

俺のクラスの副担任である

ちなみに今の先生の挨拶に対する生徒からの反応はなかった

「え？ とやうですね・・・、それでは最初のヒストリーパスをさして会員紹介をしてもらおうか？」

先生はまずくなった空気を振り払つたためにさつ提案する

それにしたがいみんな簡単に自己紹介をしていく

俺は苗字が霧生なので五十音順でいくと最初のほうなのだが今はとくごくくりなくみんな座つたため苗字を仮にする必要はない

ちなみに俺が座つたいるのは廊下側から2列目の一一番後ろで今は窓側から紹介して言つていいので両分は回つていらない

・ それにして やはり 予想していたとは いえかなりきつい状況
だな

自分以外全員女子といつこの状況は

いや、もう一人いたな

たしか名前は「織斑一夏」だったよつたな気がする。前に俺と一緒にテレビで扱われていたはずだ

今は一番前の席に座っている

後ろから見るとかなり挙動不審だな・・・

まあそれもしかたないな。俺は一番後ろに座っているので横からの視線しかないがあいつは一番前。つまりは自分の全方向から女子の視線を受けていることになる。

俺だったら・・・考えたくもない状況だな

「・・・くん、・・・くん、織斑一夏くん」
「は、はい！・」

俺がそんなことを考へて いとどいつも織斑の番になつたらしい

あまりに緊張していたからなのかはわからないが上ずつた返事を返してしまつ織斑

とうぜん周りからはくすくすという笑い声が聞こえそれがさうに織斑を緊張させる

「ひやー？あ、あの・・・お、大声出しちゃって「めんなさい。お、怒ってるかな？？もしかしたら、「めんね、「めんね！？」」

その織斑に対して自分が大声を出したことにたいして怒つてゐるのではないかと聞いている山田先生。なぜか田じりには涙がたまつていて今にも泣き出しそうだつた。

こんなで副担任、いやこのクラスをまとめることができるのだろうか？

俺が言うのもなんだがこのクラスは相当おかしい編成をしている

男性でありますながらE-Sを動かせた”俺”と”織斑”だけでも相当ことだがそれだけではなくこのクラスには篠ノ之束の妹がいる

そらには対暗部暗部組織”更識”の従者までいる始末

そのほかにもイギリスの代表候補生もいて相当力オスな編成になつてゐる

個人的にはデータがとりやすくなるのでありがたい話なのだがそれをまとめなければならぬ立場からすれば相当頭の痛い話だらう

このクラスの担任は誰なのだろうか

もしまとめられるような人物ならその人は人間ではないな

「ほう、だれが人間ではないんだ？」

俺がそんなことを考えていると俺の後ろから突然声がかかった

そこを向くとなんとそこにはかのブリュンビル^デ、織斑 千冬[”]が
いた

あ～やつちやつたかな～と思つていてブリュンビル^デがもう一度
問うてくる

「もう一度聞こうか。だれが人間ではないんだ？」

「あ～それはあなたですよ。ブリュンビル^デ」

隠しても無駄そうだから俺は白状することにした。だつてなんか「
うそをついたら 殺す」みたいな雰囲気してるんだもん

「その名で私をよぶな。ここでは織斑先生だ」

「はあ、それでなんでここにブリュンビル^デなかつた織斑先生がいるん
です？」

俺が心底などに思つていても黙つていた俺の隣の席の生徒が
答える

「それはね～なつちやん、織斑先生が～このクラスの担任だからなのよ～」

今答えたのは先ほどでてきた対暗部暗部組織“更識”の従者である
”布仏本音”である

なぜ俺が名前や立場を知っているかは～では翻弄しそつ

にしてもやうか～織斑先生が～このクラスの担任か～へ～

「マジで？」

「マジなのだよ～」

「せうか・・・」の世界に神はない

「どうしたの～なつちやん？」

いや、だってさあのブリュンヒルデだよ～めつげやめんどやうじやん～！見るからにルールにつるわそうだしぬんビソうだし厳しそうだしぬんぞうだし

「なんだ？不満か？」

「無満ではないですよ。ただ面倒くなりそつて鬱だなと思つただけです」

「まう。安心しよ、私は厳しいからな」

「・・・だから面倒なんぢやないですか

俺が。」んな体勢でおつになつていると横から誰かが頭をなでてきた

「だいじょ「うふだよ」なつちゃん。わたしもいるから」

「それが何の解決になるんだ?」

「え~とね~、わかんない!」

「はあ・・・もう一こよ」

俺達がこんな感じのやり取りをしているのを周囲は興味深そうに観察している。そんなに珍しがるようなものだろつか? 女子の考えはよくわからん

「さて、話はまとまつたな。次はお前が自己紹介しろ」

「なぜですか? まだ俺の番ではないはずでは?」

「き】するな。とこいつが周りがきにしきぎていいかげん収集がつかなくなりそつだからな・・・」

「はあ・・・まあ確かにこの状況は少々まずいですね

今の状況を簡単に説明すると俺、いや俺と織斑先生そして本音に対する周囲の興味や嫉妬の視線がきついです!! なんで俺に対して嫉妬の視線も飛んでくるのかはわからないが今にも爆発しそうな状況でした

なので俺は速やかに自己紹介することにした

「霧生 凪です。偶然ISを動かせたのでこの学園に条件付で入学しました。ちなみにその本音とは幼馴染です。好きなことは知識を得ることと研究、嫌いなことは面倒なのです。まあ、これからいろいろあると思いますが偶然にも一緒にクラスになつた以上仲良くなきましょう。1年間よろしくお願ひします」

俺はそういうて頭を下げた。まあ、こんな感じでいいだろ？

「さてまだ自己紹介が終わっていないようだがもうそろそろ時間がないので後のものは適当にやっておけ。ちなみに私がこのクラスの担任を務めることになった織斑千冬だ！君たち新人を15～16の間に使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。出来ない者には、出来るまで指導してやる。逆らってもいいが私の言うことは聞け、よかつたら返事をしろよくなくとも返事をしろ、私の言うことには返事をしろ、いいな？？」

・・・何といふまるで軍隊のような言葉であったがそこには消して見捨てないといつ確固たる自信を持つているのを感じさせる挨拶をした

これが世界最強の威儀といつやつなのだろうか？

と考えていた俺の思考は急に止まってしまった

「さやああああああーー千冬様、本物の千冬様よーー！」

「ずっとファンでしたーー！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです……北九州から……」

「あの千冬様にじご指導いただけるなんて嬉しいです……」

「私、お姉様のためなら死ねます……」

「……なんとか予想外だつた。世界の頂点に教えてもらえるのは確かに光栄なことだがこれはいくらなんでも予想外だつた。後最後のやつ、さすがに死ぬのはどうかと思つた。もつと命は大事にしないさい

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

織斑先生はあきれたように頭を抑えてつぶやくが彼女達にはさうして火をつけたらしく

「わやああああああ……お姉様……もつと叱つて……罵つて……」

「でも時には優しくして……」

「そしてつけあがらないようになんかをしてええええええ……」

さらヒートアップしていた……なんかここまでくると句を言つても無駄なような気がする。織斑先生も無駄だと悟つてのか頭を抑えているがそれ以上は何もいわなかつた

そんな感じで初日のHRは終わった

のだがその後俺が周りから質問攻めにされたり視線で殺されそうになつたりしたのを追憶しておこう

はあ、これから面倒になりそうだな・・・

これらの面倒見（前書き）

さて第一話ですがやはり文章などを評価してくれる人がいるのはうれしいですね

今後ともがんばるためにみなさんの応援が必要です

今後ともよろしくです

ではまた

これからの園運」と

IIS学園とはその名の通りIISについて学ぶ場所だ

それゆえに倍率も高く授業のレベルもかなり高い

何が言いたいのかといふと、入学式の口も授業があるので・・・

「・・・であるからして、IISの基本的な運用は現時点では国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ・・・」

教壇に立つて、教科書片手に授業を行つてるのは山田先生
さつきのHRではかなりおどおどした様子だったが授業にならぬとの様子は消えていた

ところがなぜに副担任が授業してるんだ?ちなみに担任は脇で腕を組んで授業を見ている

たしか副担任の仕事は担任の補佐と担任不在時の代役のはずなのだが・・・

さて、それはおこりおくれとしてさつきも言つた通りこの学園はレベルが高い

つまりとにかくこの学園に入れるやつはみんなそれなりにできるやつだといふことになる

そのはずなんだが・・・

もう一人の男である一夏の方を見てみると、教科書と山田先生を交互に見ていたら、ぱらぱらと教科書を行つたり来たりさせている

わざわざ授業には関係のないページを開いては頭をひねっている

なにをやつているんだ?

ちなみに俺はもともとが藏技研究所属なためエリにひいて知識としてコアに関して以外は完璧にしたある

なので織斑の拳動不審な動きをなんとなく眺めていた

「織斑くん、何かわからな」というがありますか??」

するとそんな織斑の様子に気がついた山田先生が一夏に対して話し掛けた

織斑ははつと顔を上げてまたなにやら困惑している

「あ、えっと……」

「分からなに」とがおつたり向でも聞いてください。なんせ私は先生ですから……」

なぜか先生ですからを強調している山田先生

本人はそんなつもりはないんだろうがそのじぐわは正直はんそくである

なぜならそのじぐわをするとさちきれんばかりの胸が更に強調されるからである

男である以上やうに田が言つてしまつのは仕方のない」とあるだ

と、つい柄にもなく考へてゐると突如俺の頭にシャーペンが飛来した
飛んできた方向は俺の左隣
つまりは本音からであつた

なんだと本音のほうを見るとそこには相変わらずのほほんとした笑
みでこちらを見ている本音がいた

ただいつものほほんとした笑みとは違い何か恐ろしさを持つた笑
みだつた
さすがは対暗部暗部組織の従者といつたところだらつ

「・・・せ、先生！」
「はい、織斑くん！…」

織斑はついに意を決したように山田先生に話しかけ山田先生はどん
とこいといった感じで返事をした

「ほんと全部分かりません！…」

「え・・・？？ぜ、全部、ですか・・・？？」

・・・おいおいそりやないだろ
さすがに山田先生も予想の斜め上の返事に困惑している

「え、えっと・・・、織斑くん以外で、今の段階でわからないうつて
いう人はどれくらいいますか？？」

山田先生はクラスに対して確認を取る
もしみんなわからないのだとしたらすさまじく問題であるからである
しかし誰も手を上げない

「・・・」

それはやうだらう

ここにこむやつはみなこの程度は理解できなければいけないのでから

「おい匂、お前はわかるのか?」

織斑が俺に聞いてくる

その匂は「お前もわからないよな?」といっていた

「当たり前だらう。」の程度理解できないのならこのいなこれ

織斑は〇へ〇の体勢をとった

授業中なのだが・・・

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか?」

そんな状況の中さつさまで腕を組んで授業をみていた織斑先生が確
認をとる

その表情はまさかよんでもいいのか?といつ顔をしていた

まあ、でもさすがに読んでないなんじ?は・・・

「古じ電話帳と間違えて捨てました」

・・・あつたよ。でかどりすれば電話帳と間違えるんだよ
たしかに電話帳サイズの厚みはあつたが普通表紙みて確認するだろ。
・・

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者！－！」

織斑先生の雷が織斑に落ちる

若干哀れではあるがこれは確実に織斑が悪い
あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな
「あの厚さを一週間で…? 無理だつて…」

「やれと言つて…」

「…・はい。やります」

そんなやり取りもありつつ一時間田の授業は織斑の頭に出席簿が落ちた以外は平和に終わった

ちなみに俺はその後ずっと本を読みました

その後の休み時間に織斑がやつてきて織斑のことを「夏と呼ぶことになつたりイギリスの代表候補生、たしかオルコットとか言うのが話しかけてきたりそこでまた一夏の馬鹿さ加減が明らかになつたり

ところどころとあつたが俺には関係ないので割愛をせてもいい

あ、オルコットが一夏に話しかけてきた瞬間俺はめんどうだったので逃げましたがなにか？

休み時間の終わりに戻つてみると一夏が「逃げたな」的な視線を送ってきたがスルーしておいた

さて時間はすすみ居今は一時間目

HRの時間を入れるとさつきのが一時間目で今が三時間目となる

教壇にたつているのは織斑先生

そのせいいかさつきまでの時間よりもクラス内が真剣さで満ちている

「それでは」の時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する

と、授業を始めようとしたがそこで一度織斑先生は止めた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と切り出した

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・つまりは、まあ、クラス長だな」

どうやらこの学園ではクラスの代表を決めなければならぬらしい

また、それなりに責任も伴つりっこ

「ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はない・・・が、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいるよ」

ふむ・・・めんどくさうだな

できればやりたくはないが」
「はーい学園

つまりは俺と一夏を除けばあとは生徒全員が女子

話題に事欠かない俺たちが推薦される可能性は非常に高い

まあ、俺はやらないけどね時間なくなるしめんどくさいし疲れるし
めんどくさいし

「それで誰か立候補者はいないか??推薦でも構わないぞ??」

「はいっ。織斑くんを推薦しますーーー」

案の定一夏が推薦される

「私もそれがいいと思いますーーー」

「私もーーー」

最初の発言に重ねるように一夏を代表にという意見が次々に上がる

「お、俺！？」

「では候補者は織斑一夏……ほかにはいないか？？もう一度言つが、自他推薦は問わないぞ。それと織斑。いい加減に席に着け、邪魔だ。さて、他にいなか？？」

「私はなつちやんを推薦しまーす」

「なぜに？」

一夏に押し付けられそうだと思った矢先俺の横から俺を推薦する意見が上がる

推薦したのはもちろん本音

なぜにという視線を向けると少し申し訳なさそりこいつをみた

おそらくはあいつの差し金か

最近まつたく連絡取つてないから怒つてるんだらつ

「はいはい、私も霧生くんに一票いれまーす」

「私も霧生くんを推薦しまーす」

またしても俺を推薦する声があがる

「候補者は霧生凪と織斑一夏。他にいなければこれで締め切るぞ」

織斑先生がそういうと一人の女子が机をたたきながら立ち上がった

「待つてくださいー納得がいきませんわー！」

立ち上がったのはさつき一夏に突つかかって言っていたイギリスの代表候補生のオルコットであった

「待つてください！？そのような選出は認められません！…大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！…わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

・・・

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！…わたくしはこのよつな島国までIS技術な修練に來てるのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！…」

・・・

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！？ISの知識もろくにない極東のサルや、ISも使えないくせに玩具でISに対抗しようとしている極東のサルがクラスの代表になるなんてありえませんわ！…」

・・・うぜえよこいつ

なんかマジでイラついてきた

いつもは切れたりしない俺だが今回は々々に切れそうだ

だが、落ち着け冷静になれ

「ほつておけば俺は代表にならずにすむ

面倒」とに巻き込まれない

・・・よし落ち着いた

このままこいつをおだてて押し付ける方向でこいつ

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだる。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なつ……！？」

なんか一夏が切れた

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「侮辱もなにも、先に馬鹿にしたのはそっちの方だ。違うか？」

・・・あれ？

「決闘ですわ！」

「おう。いいや。四の手の言つよりわかりやす」

おかしいな・・・

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いえ、奴隸にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そうですか？ 何にせよちゅうどいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたない機会ですわね！」

「ハンドゼンジのへりこつかるへ。」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンドをつけたらいいのかなーと」

「お、織斑君、それ本氣で言つてるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

クラス全体が笑う

「なに言ってんだよ、俺と戻はーじ使えるんだぜ？ やつてみなきやわかないだろ？」

なあ？ と言いたげな視線を送ってくる織斑

なんかよりいっそ、面倒な事態になつてね？

「よし、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。まずは織斑とオルコットで戦い勝つた方と霧生が戦う。それでいいな」

有無を言わせない織斑先生の言葉でしめられた

あれ？俺一言もしゃべっていないのになんか面倒」とに巻き込まれてない？

これらの回数」と(後書き)

どうでしたか?

文章の文字数は少しだけ前回よりも多いですがそれでもまだ少し少ないですかね?

今後も精進していきます!!

初日の終了と感想（前書き）

こんな駄文を読んでくれる方がいるなんて感激の極みです

今後ともがんばっていきまーす

ぜひ作者のために感想などをくれねといれしゃいです

でせどりつば

初日の終りと再会

「よつやくおわった・・・」

よつやくH学園初日の授業のすべて終了したのだ
背伸びをするとばきばきという音がした
一夏のほうをみると机に突っ伏している

まあ一日中最前列という位置で女子からの視線をもろに受けていた
のだから仕方ないか
それに自業自得とはいえ織斑先生に何回か出席簿アタックをくらつ
ていたからな～

てかれぜつたい出席簿でだせる音じやない気がするんだがな・・・

俺がそんな感じのことを考へているとさつきまで机に突っ伏してい
た一夏が話しかけてきた

「よつやく一日終わつたな～」

「ああ、お互いお疲れ様だな」

「ああ、こしてもこれは肉体的な疲れつてよりも精神的な疲れが大
きこよつな気がするよ」

「それについては激しく同意する」

はあと男子一人今日のお互いの状況を話しながらお互い励ましあつ
ているとさつき出て行つた山田先生が戻ってきた

ちなみに今は最後の授業が終了してから2時間ほどたつてこのるので

わざとこう表現はおかしいのだが山田先生はわざまで今日の授業で一夏の知識に相当な問題を感じたよう

「先生ですか……」

といつて放課後一夏に工科について補修したいのだ
ではなぜ余裕な俺もここにいるのかといつと

「山田君はその、なんというか、少々想像が過ぎるというかなんと
いうか・・・とにかく危ない状況になることがある。お前だけが頼
りだ！」

と織斑先生に言われたため言い方は悪いが山田先生の監視のために
一緒に残っていたのである

まあ今日の授業を見る限りこの一人だけにすると補修どころではな
くなりそうだしな
無難な判断であるといえるだろう

さて、その補修が先ほど終了したわけだが当然入学前の参考書を捨
ててしまい読んでいない一夏が簡単に理解できるはずもなく結果的
に今日一日のどどめを山田先生にされた形になつた

この後田一夏にはさらに物理的などどめが下される斧だがここでは
割愛しよう

「ああよかつた、まだいました」

と、先ほど出て行つた山田先生がすこしきそいで戻つてきて言つた

「おー一人の部屋割が決まりましたよ」

「え??俺は確かに週間は自宅通学って言われてたんですけど??」

部屋割りが決まったという言葉に疑問を返す一夏

普通に考えればわかるだろ・・・

と若干あきれていると山田先生が

「ええ、本当はその予定だつたんですがおー一人の場合は特別なケースでしたので何とか部屋を用意したんです」

「??なんで俺らは特別なんですか??」

はあ・・・いひつ自分の立場わかつてないな

「一夏、俺らがい今言つのはどーだ?」

「え? IIS学園だろ?」

「そりだつまでは俺らはIISを動かせる。そして俺らは男。これがどういう意味を持つのかわかるだろ?」

「??」

本当にわからないといった顔をする織斑
山田先生も若干苦笑いをしている

「つまり俺らは研究者やほかの男たちから狙われる危険があるんだよ。研究者にとってはいいモルモットだからな俺らは

「ああ、でもそんなことおこらないうだろ?」

「「」の世界に絶対なんてない。可能性がある以上ここにおこっておくのが一番なのさ。納得しなくても理解はしておけよ」

俺は最後にそう一夏に告げる

一夏はわかつたようなわからぬいような表情をしていた

「それで山田先生、俺らは相部屋ですか?」

そろそろ部屋に帰るうと思いつ山田先生にきく

「いえ、部屋割りの都合上お一人は別々でそれぞれ女生徒との相部屋になります」

少々気まずげにいづ山田先生

「やうですか・・・まあいいですなるようになるでしょう。で、部屋番号は?」

「えーと織斑君は1025で霧生君は1034です」

そういうながら鍵を渡す山田先生

「それとこの学園意は大浴場があるんですけどお一人はまだ使えません」

「え? 何ですか?」

おーおい一夏そんなことわからんのか?

「お前は女生徒と一緒に風呂に入りたいのかばか者」

「ばじょん……とこつ出席簿が一夏の頭に落ちる音とともに織斑先生が現れた

てか威力高いなってだつて一夏伸びてるし

「お、織斑君! ? 大丈夫ですか! ?」

「霧生やつの」とは気にせず部屋に行け。荷物は今日お前が学園に送つたものを運んでおいた。」

「やうですね、やうやせてもらいます」

俺はそつこつと部屋にむかつて歩き出した

「1034 いいだな」

「んこん

一応鍵を持っているが同居人が何をしているかわからない以上礼儀としてノックをして様子を見ることがした

「へ.ビ.う.ギ.~」

中から返事が返ってきた

「失礼しする」

俺はそういうながら部屋に入った
部屋に入るとそこにはベッドが3つならんでいてそのうちの2つに
人がいた
おそらくは同居人だらう

「あれ？ なつちゃんだ～どうしたの～？」

「え？ 凪！？」

「何でお前らがここに？」

部屋のベッドにいた同居人は俺の幼馴染
同じクラスで隣の席の布仏本音と更識簪の一人だった

俺はむかし両親が自殺してから更織家に少しの間やっかいになつて
いた

本音は幼稚園のころからの知り合いで幼馴染
簪はお世話になつたときに知り合い仲良くなつたことらも幼馴染で
ある

「それはこじがわたしとかんちゃんのへやだからだよ～」

俺の先ほどの問いに答える本音
簪はあまりの自体に呆然としている

「え？ え！？ 凪！？ なんで、ここに…？」

簪はよつやくわれに返るといつもの彼女からは想像もできないべりいおおきな声で言ひ

「俺も今日からここで生活するんだよ」

「わ、なんだ・・・」

「なつちゃんと一緒にか~」

「「めんな。いやかもしけ」」「そんな」となご（よ~）ー、「そ
うか」

俺が言い終わる前に言葉をさえぎる一人
いくら知つた中とはいえ同居はいやだろつと思つたが一人は若干ほ
ほを染めながら俺の言葉を否定する

「それにしても・・・なんで連絡くれなかつたの?」

簪が少し怒つたふうに聞いてくる

「忙しかつたからつてのもあるけど俺も必死だつたから。正直に言
うと周り気にする余裕なかつた。」めん・・・

俺が倉技研に配属してからは本当に忙しかつた
知識と知つていて理解していくも自分で考え作るといつのは勝手が
ちがつた

いくり俺が俗に言つ天才でもその日々はまさに多忙だつた
だから連絡したりすることに気を配れなかつた

「・・・セ、う、なんだ

「い、めん・・・」

「いいよ、も、う。また・・・会えたから」

「ありがとう。それと俺もうひとつ謝らなこといかなことがあるんだ」

「なに・・・?」

「簪の専用機開発を倉技研で請け負ったのは知ってるだろ?」

「うそ」

「その専用機なんだけど・・・俺にしか使えなくなつた

「・・・どういふこと?」

「俺がエラを動かしたのは知つてるだ? そのとき起させたのがその簪の専用機だつたんだ。俺が起動させてから何度コアを初期化しようとしても受け付けなくて今俺の専用機のコアとして使われてる。だから今簪の専用機は何もできないだ・・・」

「やつ・・・ひこ、いこよ

「え?」

「別にいこよ・・・私は、屁とまたこうしてあえるだけで・・うれ

しげり

「いめん。そしてありがと」

「うふ・・・・」

「それで専用機だけ」

「うふ」

「俺が学園側から譲渡された打鉄のコアを使って俺がいい（学園）で作ることになった」

「・・・・このの？」

簪はためらいがちに聞いてくる
簪は昔から我慢ばかりしているからな

「いいもなにももともとつちで作ることになつてたからね。それを俺のせいでコアまでなくしたんだから俺が一人で作るよ」

俺がそういうと簪は首を横に振りながらいつた

「一人、じゃないよ・・・私も手伝つ

そう申し出できた

「でもこれは俺の責任だし

「いいの。手伝わせて・・・」

声は小さいが俺はそこに確かに確かな簪の血「」主張を感じた
これを拒むのは失礼だろー

「わかった。俺たちで最高のものを作ろー。」

「うん・・・・・」

「わたしのこと忘れてないかな〜・・・・」

「「あ・・・・」

「やつぱり忘れてたんだ・・・・」

こつして今日

I.S学園入学初日は終わった

今日一日で相当疲れたな・・・明日からの生活が思われるよ・・・

はあ・・・

追記 その夜の夕食は久しぶりに簪と本音、それといつの間にか現
れた樋無と虚と俺の5人で外食しました

外出許可申請?そんなものするわけないじゃないです
そこらへんは樋無に何とかしてもらいました
仮にも生徒会長みたいだしそこらへんは融通が利くようだつた
まあ、そのとき虚が頭を痛めていたことから手続きなどは虚に丸投
げしたんだろうが・・・

初日の終アート再会（後書き）

次の投稿は1週間後です

クラス代表決定戦（前書き）

今回は廻君の戦闘シーンはあつません

次話へのつなぎです

感想などなどよろしくお願ひします

クラス代表決定戦

あのIIS学園入学初日に俺に降つて来た面倒ごとの日がやつてきたイギリスの代表候補生が宣戦布告してから1週間その間俺は自分のIISの整備開発を簪、本音と三人でして過ごした一応完成してはいるので戦闘はできるがまだ完全に完成していないものがあった

「エナジーウイング」

俺の機体に実装している次世代飛行ユニット

その名の通りエネルギーで翼を形成して今現存しているビの技術よりも飛行能力を高めることができる
エネルギーによる形成された翼なのでそれそのもので防御することもできる

と、ここまでならただ便利な次世代の技術なのだがこれは問題を抱えていた

そう、この技術はエネルギーを翼の形に固定しなければならない理論は出来上がっているのだがまだ完成はしていないのである
飛行ユニットが出来上がりなければ普通の戦闘はできない
なのでなんとしても完成さえなればならない

なので俺は簪たちに協力してもらつた

楯無や虚も協力してくれるといったのだが生徒会所属の人間が肩入れするのはまずいということで辞退してもらつた

1週間簪たちと整備室を借りきり作業をするため何とか固定化まではできるようになつた
これでなんとか飛行はできる

だが、ここでもまた問題が発生した

出力を上げられないのだ

出力を上げると形の固定化ができなくなり固定化されていたエネルギーが暴発し命の危険があるので

試験的に出力を上げたさいそれが起こり俺は危うく死に掛けた

なので今の俺の機体は最大出力を出すことができずベストな状態には程遠かった

まあ、それでも既存の第3世代型には遅れをとらないだろうが・・・

さて今俺はアリーナのモニターで一夏とオルコットの試合を見ている
今回はクラス代表決定戦という名目での一夏とオルコットの決闘の
ようなものなので俺は完全にとばっちりだらう
なのでまずは一人で試合をしてその勝者と俺が戦うという方式をと
つている

なので俺は今モニターで試合を見ているのである

試合は開始のブザーとともにオルコットが一夏に向けて射撃をした
銃の名前はスターライトというらしい

当然初心者の一夏がかわせるばずもなく被弾しいきなりシールドエネルギーを削られる

それからお互い攻防、いや一夏は交わしていただけだがを繰り返し30分ほどが経過した

一夏はシールドエネルギーを三分の一くらいまで削られいっぱいにぱいなのに対してもオルコットはいまだ無傷だった

まあ相手が代表候補生というのもあるが何より機体の武装相性が圧倒的に悪い

オルコットの「ブルー・ティアーズ」は巨大な狙撃用レーザーライフル「スター・ライトマーク3」と、機体名と同名の自立誘導兵器通称4基による全方向からの遠距離射撃を可能にしていてのに対し、一夏の「白式」の白式はなんと近接ブレードが一本だけ

これで30分も持つのはさすがとしか言ひよづがない

アリーナ内も一方的な試合内容にあきれの空気が漂っていた

俺に言わせればあのビットには問題があるように思える
なによりオルコットのが直接命令を出しているため攻撃パターンが
単調にならざらにはビットを操作している間は一度もスター・ライト
を打つていらない

おそらくはビットの制御に手一杯で射撃ができないのだろう
そこをつけば近接ブレードしかない一夏でも何とか勝機があると思
うのだが一夏が気づくかどうかが問題だな・・・

なんせあいつはこの1週間ずっと剣道をやっていたと聞く
確かにEVAはあくまでもステッソなので悪くはない選択だが初心者が
扱い方も知らないのに動きを学んでも意味がない

さて、あいつは氣づくかね？

俺がそんならちもないと考へているとモーター内で状況が変わつた

一夏が近接ブレードでビットを切り裂いたのである
先ほどまでかわすので精一杯にみえた一夏だが今はビットの攻撃を完璧によけ次々に切り裂いていく

どうやら癖に気がついたようだ

オルコットの操るビットは必ず人の死角となる場所からしか攻撃してこない
つまり後ろや真下にしかこないのだ
それに気づいたらしい

一夏の動きは先ほどまでは打つて変わりよくなつていた
ビットをすべて破壊しそのままオルコットに向かつて突っ込んでいく
だが次の瞬間一夏は爆炎に包まれた
どうやらオルコットがミサイルを一機隠しもつていたらしい
直撃を受ければあのシールドエネルギーでは終了である
オルコットも自分の勝利を確信しているようだつた

だがまだ試合は終わつていなかつた

爆炎の中から一夏は出てきた

出てきた一夏のまどつていた機体はさつきまどとは違つていた

なにより気になつたのは先ほどまでもつていた近接ブレードである
先ほどまでは普通のものとなんら変わらない形をしていたそれは今はブリュンヒルデが使用していた近接特化ブレード「雪片」に酷似していた

・・・もし自分が本当に「雪片」なのでとしたらおそらくあれの能力は

「バリア無効化攻撃」

相手のバリアなどを無効化し攻撃することができるまさに一撃必殺の能力
ビーム兵器に対して絶対的な力を発揮するそれはまさしくオルコットの天敵になるだろう

・・・ただ本当にそうなら今の一夏が使えば

そこでブザーが鳴る

「試合終了、勝者、セシリーオルコット！」

負けるぞ？

「なんで俺負けたんだ？」

俺が一夏のピットに行くと案の上一夏は自分が負けた理由がわからぬようだった

確かにあの時一夏の攻撃はオルコットを捕らえいた
確かに決まつたはずの一撃

しかし現実には負けたのは一夏だった

俺の予想では・・・

「それはバリア無効化攻撃を使ったからだ」

織斑先生が一夏に解説したいる

一夏が負けた理由は俺が考えていた通りバリア無効化攻撃を使用したためだった

あれは確かに強力な能力だが自身のシールドエネルギーを攻撃に転用しているので相手が何もせずに自分からシールドエネルギーをけずつてしまふのだ

「こうならばその白式は欠陥機だ」

「え！？ 欠陥機！？」

自身の機体が欠陥機だという織斑先生にたいして反応する一夏

「いや、これは言い方が悪いな。そもそもIISは完成などしてないのだからな。お前の白式は普通のIISに比べてはるかに燃費が悪いということだ」

「まじかよ・・・」

織斑先生の説明に肩を落とす一夏

でも実際問題一夏の「白式」の能力は高い

おそらくは俺の“あれ”をも貫通する能力を持つているのだからな

「まあ、そもそもお前は初心者だ。これからはIISを何度も展開し

なれていくだな

そつ締めくくる織斑先生

その後山田先生からあほみたいな厚さのマーカーを受け取っていたなんでも校内でのIHSの展開などに関するルールブックのようなものらしい

「さて、次は霧生の番だな。準備はできてるのか?」

俺にそつ聞いてくる織斑先生

「ええ、一応はできますよ」

「なんだ、うかない顔をしているが?」

「そりゃやつですよ。どばつかつのせいでまだ完全にはできてないじつ(鋼)を使わなきゃいけないんですから」

俺はそつ返した

「まあ、データをとること機会だらうへ」

にやりとこつ表情で聞いてくる織斑先生

確かにそつなのだが面倒なことになりはない

「はあ・・・ではいりますよ。おこで、鋼

俺がそつこつと首から提げていた銀のネックレスが光IHSが展開される

全体が黒く間接の部分までも装甲で覆われ顔にもヘッドギアのようなものをつけている

間接の部分はにぶい銀の色をしていてどこか鎧を思わせる

「それがお前の・・・」

「はい。俺の専用機 鋼 です」

俺はそうこうとアコーナに出て行つた

絶対の防御力（前書き）

今回はじょじょ戻の戦闘シーンです

戦闘シーンの描[跡]は短い上に下手ですがどうかそこは温かい目で見て下を

絶対の防御力

俺が織斑先生に返事をしてアリーナに出るとそこには先ほどの戦闘で一夏を下したオルコットが空中で待機していた

俺がアリーナに現れてのを確認したオルコットはどこか申し訳なさそうな感じで俺に話しかけてきた

「お待ちしておりましたわ、霧生さん」

教室で男子を見下して一夏に喧嘩を吹っかけた人物と同一人物とは思えないほど穏やかな口調でその態度にも俺を見下すような様子は見受けられなかつた

しいて言ひながら「戸惑い」だらつか? そんな感情が見て取れた

「どうかしましたか?」

俺が不思議そうに見ているのに気づいたのかオルコットは俺に話しかけてくる

「いや、ずいぶんと雰囲気が違つからな。驚いた」

「それは・・・すみませんでした」

オルコットは素直に謝罪する

本当に何があった?

「いや、俺自体は特に何もいわれたりしていないから別にいい。それはそうと何かあったのか?」

俺は気になつてることをきいてみることにした

まあ、俺の予想では一夏との間に何かあったとしか考えられないが
感さえられましたわ

「そりか。やはり一夏だったか・・・」

俺は若干あきれを含んだ口調で言つ

俺は一夏とそこまで親しいわけではないがこの1週間あいつを見ていた限りでは一夏は天然のフラグメーカーの才能を持っているのだろう

あいつは無自覚に人に優しくするからな・・・

それでおちる女子は多いようだ

いつか後ろから刺されてNICE BORTにならなければいいが・
・

「ええ・・・／＼／＼／＼

オルコットの様子を見る限り間違いなくおちてているだらつ
はあ・・・

誰とどういう関係にならうとも俺はどうでもいいが少なくとも俺に
とばっちりで面倒」とが降りかかるのだけは勘弁してほしいな
具体的にいえば織斑先生の愚痴とか愚痴とか愚痴だ

「で、どうする。俺とは試合するのか?」

俺はこのままでは埒が明かなくなつたので確認することにした
このままだとこつまでたつても状況は変わらないからな・・・

「ええ、これはクラス代表を決定する試合ですので」

俺の問いにオルコットはやつ答える
どうやら試合はするらしい

ただこのまま試合しても俺にメリットないんだがな
だつてもし俺が勝つたら俺とオルコットは1勝1敗で並んでしまつ
もしそうなつて場合さらに面倒になる可能性が高い

俺が負けてもなんかあとからそれをネタにあの生徒会長とか生徒会
長とか生徒会長にいじられそなので負けるわけにも行かない

俺どつちに転んでも面倒げとに首突っ込むよな・・・

はあ・・・

まあいい

今は試合に集中するとしよう

「じゃ早速はじめるとするか

「やりますわね」

「ところで、先ほどから気になっていたのですが・・・あなたの工
具は全身装甲なんですか?」

俺の工具について気になつたのだらつ

俺の工具は広域殲滅と絶対の防御、そして指揮能力の3点を

徹底的に追及した機体である

そのため絶対防御ではなく全身を特殊な装甲で覆っている

そのため機動力は全機体の中で最低の部類に入るだろう

それを緩和するためのエナジーウイングなのだが・・・

『話はまとまつたようだな。ではこれより霧生凪対セシリア・オルコットの試合を行う。』

俺たちの話がまとまつたのをみて、個人的にはいろいろと考えているのだが、織斑先生が告げ直後試合開始のブザーが鳴った

「では、行かせてもらいますわー！」

オルコットは試合が始まると一夏のときと同じようにスタートライトを打つてきた

当然いきなりの奇襲なのでよけられないだろうと思っていたオルコットだがその予想は外れた

「じゃ～ね～」

スタートライトが打たれたその瞬間に風はその場にはいなかつた

「ー・?・ビ・!・ー・?・

すぐさまHJのハイパーセンサーで探すが凪の姿はどこにもない

「消えた！？」

「嵐のやつビリビリつたんだよーー？」

「・・・・・」

ピットから試合をモニターで見ていた一夏たちは突如消えた嵐に驚きの声を上げる

ちなみに今の発言は上から順に篠、一夏、織斑先生である

山田先生は驚いて声も出せずにいた

それからさりに10分が経過したがいまだに嵐の姿は捕捉できずにいた

試合開始のブザーが鳴るまでは確かに空中、それもオルコットの視界にいたはずの嵐

しかし開始と同時に姿を消し今の今まで捕捉できずにいる
これは異常な事態だつた

「ああ、もうーーービリビリつたんですのーー？」

オルコットはいらだつていた

そもそものはず

試合開始と同時に放つた射撃をかわされたのならまだしも捕捉すら

できなくなつたのだから

だがそんな状況は突如一変した

いきなりオルコットの真下から赤黒い極太のビームが発射されたのだ

突然の事態に対応できずオルコットはそのままアリーナのシールドに一番上まで吹きとばされた

「ひ、ひ・・これはいつたい？」

絶対防御では防ぎきれなかつた衝撃を受けたオルコットは自身に何が起きたのかを確かめようとさつとまくまで自分がいた真下を見た

「なつー。」

そこには試合開始同時に姿を消しまのいままで捕捉できなかつた
凪がいた

嵐は試合開始と同時に鋼に搭載されている機能の一つを使用していた

「//ハーディコロマイア」

ありていに言えば周りのいろいろな景色に溶け込み自身の姿見えなくする能力である

その鋼に使用されているそれはEISのハイパー・センサーをもつてしても探知できないため作業の時間が必要だった嵐はすぐさまこの能力を使った

嵐のしたかつた作業

それは”絶対守護領域”の調整だった

アリーナに出た嵐はすぐに鋼のHナジーウイングの不調に気づいていた

やはりまだ未完成ゆえにこのまま飛行しているのは危険だったのださすがに嵐や簪ががんばったとはいえ、やはり1週間という時間では戦闘に耐えうるレベルまでの調整はできなかつたのだ

あるといつなるのか

嵐は空をとべないのである

相手が空中にいる以上自分も飛べなければ不利

そりゃ元は癖がわかつたとはいえるの自立行動兵器はかなり厄介だった
ではどうするのか？

交わすのが困難ならば防げばいい

嵐はそう考えたのである

この機体”鋼”には絶対の防御領域を展開する能力がある
しかしそんな便利なものがそう簡単に使えるはずはない

絶対守護領域を張るにはそのつど展開する範囲、時間などを逐一計算して展開する必要がある

そしてそれには戦闘する場所の環境データを打ち込む必要があった
いままでの屋外の制限されていない環境を想定して開発されていた
が今いるのはアリーナ

周りをシールドで囲まれ上にも下にも空間の制限がなされている

そのままでは「」の能力を使いつぶことができなかつたのだ

だから嵐は姿を消してしままでその環境データを入力していたのである

「大丈夫かい？」

嵐は自身の攻撃をうけて吹き飛んだオルコットに声をかける

声をかけられたオルコットは困惑した様子で嵐に答えた

「ええ、なんとか……それにしてもここまでどうにいたんですか？」

当然の疑問をぶつけてくるオルコットに対して嵐は答える

「ずっとこのアリーナの地面にいたよ。さつきみに攻撃するまで俺はずっと同じ場所にいた」

「でも、ハイパーセンサーには何の反応も……！」

俺の答えに対して納得ができないのかさらに聞いてくる

「まあ、姿が見えなかつたのせいでこの能力のひとつだ。ちなみに今まで」二つの能力の調整をしてたんだよ」

「

はあ・・・といひあなたは空を飛ばないんですね？」

疑問はとりあえずおいておいて俺が飛んでいないことに対する疑問を口にした

「まあね。今二つの飛行ゴーラートが不調といつか未完成でね」

「・・・そんな状態で勝負になると?」

「別に飛べないから勝てないというわけではないさ。それに俺はこの状態で君に勝つために今まで姿を消していたんだよ?」

「・・・また姿を消して奇襲するおつもりですか?」

卑怯だと言いたげな表情で聞いてくる

「まさか、そのつもりならいつって姿を現したりはしないよ。ようやく調整が終わってね。これからが本番さ」

俺はこじともなげに告げる

「そうですか。では私もここからは本気で参りますわーー！」

そういうとオルコットは自身の機体と同名の自立行動兵器を四機射出し俺を全方向から取り囲む

「へりいなさい！！」

ビットからビームが俺に向けて発射される
タイミング的に交わしがない攻撃

しかし俺には効かなかつた

「なー!?きていないんですねー?」

驚きの声を上げるオルコット

アリーナ内も何が起こったのかわからぬようだった

「これが俺の機体 鋼の最大の能力『絶対守護領域』」

「絶対守護領域？それは何ですか？」

オルコットが聞いてくるが俺はそれに答えるつもりはない

「教えないよ。今は試合中だ、あいての自分の手の内をさりすまつがどこにいる?」

「・・・そうでしたわね。その能力は私の攻撃を無効化するようですが。ですが!-!」

そういうとオルコットはビットから再度ビームを放ち自身もスタートライトを打つ
ビットとの並行使用ができるようになったらしく

だがそんなオルコットの猛攻も風にはきかない

先ほどいった『絶対守護領域』により完全に防がれいまだシールドエネルギーを減らせていかなかった

「くつ!なんて硬さですの!-!」

オルコットはエネルギーが切れたビットを戻しながらそういった

「それは光榮だね。でもいい加減疲れたから終わりにするよ」

「？？」

嵐はそうこうと自身の展開していた絶対守護領域けすと胸部にある発射腔を開いた

そこにはプリズム状に凝固させた特殊な液体金属が装填されていた

嵐はそれをオルコットのいる方向ではなくアーダーの重心に向けて発射しさらにそれを追うように高威力のビームを胸部から発射したトに向けて襲い掛かってきた

「くつーー?」んなことがー?」

何とかかわそうとするが何せ反射の範囲が尋常ではなく逃れることはできずにそのまま直撃

シールドエネルギーは0になつた

『そこまでー勝者・・・霧生凪!』
こうして今回の試合は俺の勝利となつた

絶対の防御力（後書き）

感想などよろしくお願いします

主人公紹介（前書き）

今回は主人公の紹介です

ちなみに主人公の外見は急に変わることがあります

主人公紹介

主人公

霧生 凪きりゅう なぎ

歳 15

クラス 1-1

目の色髪の色ともに黒の典型的な日本人

幼いころに両親が自殺しておりその後は更識家に厄介になっていた
両親の件については不明な件が多く本人もそれについては知らない
ようである

そこで簪、本音と親しくなった。

倉技研に配属してからは家に帰らず倉技研に住んでいた
その間音信不通

非常に穏やかな性格で基本的に怒らない

幼少の頃より周りから疎まれてきたために本質に孤独がありそれが
世界を変えるという行動につながっている節がある

IS学園入学時に倉技研をやめている

> i 3 3 8 4 0 — 4 0 9 3 <

専用機

名前 鋼

凪が開発した次世代型ISで凪の心の移し身とも言える存在もともとは「打鉄式式」で簪の専用機の予定だつたが凪が起動してしまつたため凪の専用機になる

その後凪による改良が加えられ今の”鋼”になつた

全体が黒で間接の部分が銀色の全身装甲

第三世代のイメージインターフェースの応用による思考トレースシステムを搭載する

絶対守護領域の展開範囲計算、拡散構造相転移砲の反射角計算などを自分でやらなければならないため、優れた状況判断力と演算処理力が重視となる機体

待機状態は銀のネックレス

武装

長距離高エネルギー砲「ハドロン砲」

両肩にそれぞれ一機ずつ砲門をもつ高威力のエネルギー砲

その名のとおりハドロンをつかつたものであり長距離の敵であつても問答無用で撃墜する

「拡散構造相転移砲」

胸に搭載されたプリズム状に凝固させた特殊な液体金属を追うように高威力のビームを発射することで、広範囲にビームを乱反射させ長距離かつ広範囲の標的を一度に殲滅する兵器・拡散構造相転移砲が搭載されており、攻撃力・防御力に優れた最高クラスのスペックを獲得している。なお、拡散構造相転移砲は液体金属を用いない一点集中砲撃も可能

レールガン「クスイファイアス」

両サイドスカートに付けられた本機唯一の実弾装備
威力はほかのものに劣るが弾速が早く威力も第三世代兵器より高い

次世代試験飛行ユニット「エナジーウイング」

この機体の最大の目玉

エネルギーを使ってスラスターを動かし飛行する今までの常識を覆すもの

エネルギーそのものを羽の形に固定することで従来のものとは比べ物にならない安定性と飛行速度を誇る

また、それ自体非常に硬く自機にまとわせて防御することもできる
いまはまだ未完成であるが完成すればウイングそのものからエネルギー弾を射出することも可能になる予定

「絶対守護領域」

全方位エネルギー・シールド・絶対守護領域を機体周囲に展開し、全方位からの一斉射撃や至近距離からの自機の拡散構造相転移砲をうけてもびくともしない絶対の壁

「マルチロックオンシステム」

試験的に組み込まれたシステム

本機の全武装を同時に使用し広範囲の目標を一度に狙い打つ
それぞれの目標にたいして起動予測などをしないといけないため扱いが難しいシステム

主人公紹介（後書き）

どうでしょ'うか？

兵器を書いたことがないので鋼は完全にお絵かきになっています・・

* 12月9日に絵を削除、性能を一部修正しました
できれば感想がほしいです

代表決定と新たな専用機（前書き）

今回は若干二つものに比べて短いです

いつも短い？すみません・・・

ではどうぞ

代表決定と新たなる専用機

代表決定戦の次の日のH.R
クラス代表の名が山田先生の口から発表された

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫があり
でいい感じですね！」

そう、俺のクラスの代表は一夏に決定したのだ
試合の結果は一夏が一敗でオルコットが一勝一敗、俺が一勝という
結果だった
ここで分かるように一夏はクラス代表になる要素はない
だが一夏が代表に選ばれたのには理由があり・・・

「先生 質問です」

一夏が手をあげて山田先生に質問する

「俺は昨日の試合に負けたのになんで俺がクラス代表なつているん
でしようか？」

「それは・・・」

山田先生が説明しようとしたのを遮るようにオルコットが説明しだす

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

なんとも偉そうに「うオルコット
だがオルコットの説明はまだ続き

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから…」

なんとも上からなぞ意見である

まあ、たしかに試合は一夏の負けだったが勝負は一夏の勝ちだったといえるだろう

あのときの一夏の最後の一撃は確実にオルコットをとらえていて、当たれば確実に一夏の勝ちだった

結果は一夏の自滅だったが本人は勝つた気がしなかつたのだろう

まあ、それだけが理由ではないようだが・・・

「それでまあ、わたくしも大人げないまねをしてしまったと反省します・・・」一夏さん”にクラス代表をお譲りすることにしました。やはりEIS操縦者には実戦がなによりの糧。クラス代表ともなれば戦いにはことかきませんもの」

と、なんともそれらしい理由を並べてはいるものの本心は訓練としてうして一夏といられるからだろう

だつてさつきの言葉の中で”一夏さん”と名前で呼んでいたからな

「オルコット・セシリ亞とお呼びくださいですわ」セシリ亞のほうはわかつたけど風はどうなんだ？お前も推薦されてたしセシリ亞に勝つてるだろ？

まあそう聞いてくるわな

「まあそりなんだがな。残念なことに俺の機体まだ未完成でな、無理して使つてみたがもしされで壊れたら元も子もないだろ? いつ完成するかもわからないから俺が代表になるのは無理なんだよ」

そう

俺の機体 鋼 は昨日の試合で確認したようにエナジーウイングの調整が完了していない

それに武装もまだ未完成で昨日オルコットに打つたビームも威力が足りなかつたし先制につかつたハドロン砲もエネルギー変換効率が悪く未完成である

つまりところ実戦投入はできないのである

本音を言えばめんどくさいといつこのと簪の機体の開発で忙しこうのもあるが・・・

「まあ、がんばれや一夏。俺は応援してるよ」

俺はそうこうして会話を終わらせた

なんかその後オルコットと篠ノ乃がもめて織斑先生にありがたい出席簿アタックを受けていたようだが気にしないことにした

だつて関係ないし

IS学園整備課

今そこには霧生凪、更織簪、布仏本音の三人がいた
ちなみに時間は午前の授業がやっているであろう10時である
早い話がこの三人は先ほどのH.R（簪は別のクラスである）の後そのままここにきているのである

つまりは授業をさぼっている

「本音・・・本当にいいの？今は織斑先生の時間なんじゃ・・・？」

「ん~いいんじゃない？なつかんに手伝いだし」

少々気が弱そうに聞いた水色の髪の少女が簪
それに気の抜けたような返事を返した少女が本音である

「俺は」」で授業中に何しても干渉しないっていう条件で」」に
きてるからいいんだよ。それに簪と本音は手伝いつてことにしてる
から大丈夫だよ」

そう答えた少年が霧生凪である

「それにも大丈夫なの・・・? 鋼・・・」

「うーん。まあ大丈夫なんだけど武装がね~それにえなじーウイン
グの調整もまだまだだし・・・」

「でも、武装は使つてたよ~?」

「使えるには使えるけどエネルギーの変換効率がまだ完璧じゃなく
てね。このままだとすぐにガス欠だよ」

「エナジーウイング・・・のほうは?」

「それもまだ実戦は無理だね~ 固定化できても安定しないから安全
に飛べないんだ」

なんとも行き詰つた状態である

「とつあえず今は鋼の方は置いておくとして先に簪の専用機のほうを調整しよう」と黙つ

俺がそつ切り出すと簪はおどりこたよつて聞き返す

「・・・えー、もひ・・出来てるの?」

「完成はしないけど割つてとじだね~武装全体はできてるんだけどいつもエナジーウイング使つかう」

そつ言いながら足は簪の専用機のデータを表示させる

「これが・・・私の専用機・・・」

「そつ、現存するビの機体よりもスペックが高い俺の技術の集大成。
”紅蓮”だよ」

「紅蓮・・・」

「へへ赤いんだ~かっこいいよ~」

それぞれが感想を述べる

「でも・・・いつもエナジーウイングできないんじょ・・・？」

当然の疑問を聞いてくる簪

それに凪は苦笑しながら答える

「まあね、でもこの機体に使つてる武装はどれもこれも新技術でね、実戦データがないと調整ができないんだよ」

「それじゃあ使えないんじゃないの〜？」

本音がもつともなことを聞いてくる

簪はじつとこっちを見ている

心なしかその視線は期待が見え隠れしている

「いや、そうでもないんだ。エナジーウイングの開発が間に合わない場合を考え一機だけ飛行ユニットを作つておいたんだ」

そういうながら凪はまた新しいデータを表示する

「”飛翔滑走翼”これが俺の開発した新型の飛行ユニット。出力、機動力ともにエナジーウイングには遠く及ばないが現行のどのスターよりも早いと思うよ」

凪が見せたデータに移っていたのは凪の開発した新型飛行ユニット
”飛翔滑走翼”

普通のスラスターとは違い見た目はエナジーウイングに近い形をしている
違つるのはエネルギーを固定化する方式をとつていいこと

「これがあれば紅蓮は戦闘ができるよ」

「でも・・・それなら嵐の機体にも・・・それに初期化と最適化がまだ・・・」

「やうだよーなっちゃんの機体も使えるんじゃない?」

「まあね~でもエナジーウイングを使わないと完全にできないし、あ、それは紅蓮もなんだけどこの予備は作ってなくてね~それに鋼には絶対守護領域がある。だから別に飛べなくてもいい。でも紅蓮は鋼とは違つて高起動機体だからね~データを取る上でも戦闘できないとダメなんだよ。それと初期化と最適化はもともと完了してるから気にしなくていいよ」

「やうひ・・・嵐と戦えないのは・・・残念・・・」

「わたしもなっちゃんの戦つてるとこう見られないのは残念だよ~」

「まあ、そういうなよ。簪のデータがあればエナジーウイングの開発も進むと思う。だから頼めるかな?」

「うん・・・・・・」

嵐の言葉に簪は肯定で答える

「頼んだよ」

凪は笑いながら簪にいつ

「で、これからどうするの~？」

本音は今回ここにあつまつた理由を凪に聞く
今回ここに授業中になつまつた理由はまだ凪から知らされていなか
つた

「ああ、そういうえばまだ話してなかつたね。今回ここにあつまつたのは簪に紅蓮を渡して最終調整をするためだよ」

「最終・・調整・・？」

「や、紅蓮にはもう飛翔滑走翼をつけてあるからあとは実線で武装
の調整をすれば紅蓮は使えるようになる」

「わかつた・・・」

「で~わたしはなにするの~」

本音は自分がここに呼ばれた理由がわからぬいらし

「本音には訓練機のラフアールで簪の模擬戦の相手をしてもらいた
い」

「わたしが~？」

本音は自分でいいのかという表情を浮かべながら凪に聞く

「紅蓮のことはまだ知られたくないからね、俺の機体はまだ出せないし、データの整理とかを俺はしないといけないからね。頼めるのは本音しかいいらないんだ」

「うん、わかつたよ、がんばるーー！」

「簪もいい？」

「もちろん・・・」

こうして三人いがいだれもいないアリーナで簪対本音の試合が行われることになった

代表決定と新たな専用機（後書き）

感想などお願いします

本当によんでもいただけなら一言でもいいので感想を書いていただけぬといれしいです

あとついでに評価も

ではでは次回もがんばった参ります

模擬戦 簡▽S本音（前書き）

とつあえず読む前に一言

どうしてこうなった・・・?

模擬戦 簪VS本音

簪の専用機”紅蓮”

その性能実験と最終調整のために模擬戦をやることになった

相手は布仏本音

生徒会の書記にして今回の主役 更識簪 の専属従者である
本人は整備課希望なためISでの戦闘は今回が初めて・・・ではな
かつたりする

もちろん二人ともIS学園の入試において教官との戦闘の際にIS
を使っている
結果は一人とも快勝

二人は本来暗部に属する者たち
それゆえにそういうことに對しての訓練はぬかりない

というわけではなかった

理由は簡単

今回の紅蓮の開発者”霧生凪”の影響である

霧生凪、更識簪、布仏本音、この三人は幼馴染である

凪の両親が自殺し、凪が天涯孤独になってしまった時に更識家は凪を引き取った

凪の両親はもともと研究者であった

IJSの登場によりその立場を否定された一人は自殺してしまったものの腕は一級品であった

それは暗部の名家である更識家が認めるほどであった

それゆえに更識家はこの少年を引き取つたのだ

「将来必ずや大きなことをする少年である」

それが更識の意見であつた

実際凪はその才能と知識への貪欲さからIJSの技術を今の第三世代に引き上げ若くして倉技研の立場ある存在へと上り詰めた

更識家の予想通りに

だが本人はそれをあまり更識家を当初快く思つてはいなかつた

自分の能力の恩恵を得たいがために行動する蠅ども

それが嵐の更識に対する最初の認識であった

しかしそこで出会ったのが「更識簪」と「布仏本音」であった
この一人は何の打算もなく自分に接してくれる

いままだそのような存在が身の回りにいなかつた嵐にとってこの二人との出会いは幸運であった

だがそれは嵐に限つた話ではなかつた

「更識簪」はその当時姉である「更識風音」（やうしき かざね）
いまの「更識楯無」との才能の差に悩んでいた

その才能ゆえにどんどん実力をつけていく姉

そもそも簪は生まれたその時から姉とは区別されてきた

ISが生まれた世界の主流になつた時からエラの適正試験をされた

更識姉妹

あんである楯無は自分よりはるかに高いランク

それに比べて自分はきつさうの二ランク

更識家では出来のいい姉 出来の悪い妹

そのように扱われてきた

簪はヒーローアニメが好きだった

ピンチの時にはかならずかけつけて助けてくれるヒーローが好きだ
つた

そして自分を助けてくれるヒーローを求めていた

それが引き取られてきた少年霧生凪であった

自分が一番困った気には必ずそばにいてくれる

自分が困って泣きそうな時に必ずそばにいてくれる

簪にとつて霧生凪とはまさに自分が求めていたヒーローだった

それは本音についても同じだったようだ

本音は最初は自分の主を笑顔にしてくれる存在といつ認識だった

自分にできなかつたことをやつてくれる

自分ができなこと」をたやすくやつてのける

感謝という感情は次第に憧れへとかわった

凪は誰に対してもやさしきわけではなかつた

ビシリカといえばかりなり不親切であつた

だが凪は自分に氣をつかつてくれる

やさしくしてくれる

憧れが疑問に変わつていつた

そしてある日本音は「氣づいた

凪は不親切なわけではない

諦めているのだ、と

自分を取り巻く世界にあきらめてこの

自分のやりたいことしかやらないのは誰も自分を見てくれないから

なのだと

実際凪は幼少の頃より天才であった

それゆえに孤独で

それゆえに誰も彼を理解できなかつた

凪は意識していないのかも知れないが彼が笑う時

そこに寂しさを本音は見た

だから気づいた

この男の子は心から笑えないのだと

こころで泣いているのだと

自分を見てほしいのだと

疑問は氷塊し

その心は恋に変わった

そんな一人にとつて大事な存在である凪がある日家から消えたのだ

書置きもなく

突如

二人は泣いた

時間さえも感じしないほど心が閉じてしまった

だがそんなとき姉である楯無から一人に凪の情報が入った

その時更織は凪の行方について調べていなかつた

また、そのよつね命令も出してはいなかつた

当時姉はまだ楯無をついでいなかつた

なのに凪の情報を持つてきた

そう

楯無、風音は独自の情報をかき集めてきたのだ

それこそ死に物狂いで

誰でもない

妹である簪のために

自分の持ちうる力

そのすべてを使って

それから簪は姉にたいして確執を持つことはなくなった

姉よりもたらされた情報は

”霧生凪は IIS 整備士の試験を pass した” というものだった

そこで一人は考えた

自分たちも IIS において力をつければ

また凪に会えるのではないかと

その後簪は姉との特訓により日本の代表候補生になり

本音は IIS 整備の勉強を姉である虚にならいその過程で自身も IIS

戦闘の訓練をした

二人はそうして IIS 学園に入学した

試験のときの教官はかなり実力があった

だが恋する乙女の力には勝てなかつたらしい

二人はものの5分で勝利した

つまり一人は IIS での戦闘に関してはかなり高い能力を持っている

簪は純粹な戦闘能力

本音は IIS のそれぞれのスペック、状態を的確につく頭脳的な戦闘能力

タイプは違えども二人の能力は同学年なかでは突出していた

ゆえに凪は自身の最高傑作を簪に託したのだが

さてここまで分かつたと思うがこの勝負どうなるかわからないのだ

簪が使うのは自身の専用機”紅蓮”

本音が使うのは量産機”ラファールリバイブ”

「じゃ、そろそろ始めるけど二人とも用意はいい?」

凪がアリーナで待機している一人へ確認する
ちなみに今アリーナには関係者以外いない

・・・ちやつかり生徒会長は観客席でみているがまあ、生徒会長だからいいのだろう

「うん・・・」

「いいよ~」

二人は準備完了を告げる

「じゃこれから模擬戦はじめるよ~」

凪の言葉の直後試合開始のサイレンが鳴る

はじめに動いたのは簪

飛翔滑走翼をフルスロットルにして本音に奇襲を仕掛ける

「はあ!~」

本音を射程に入れると簪は輻射波動を拡散状態にして放射する

「ぐ・・・いきなりだねかんちゃん」

いきなりの奇襲と紅蓮の速さについていけずにもうこ食いつてしま
う本音

「でも、これからだよーーー！」

本音はすかさず連装ショットガンをコール

両手に持ちそれをばら撒き打ちする

狙つて打つているわけではないが両手から繰り出される弾丸の雨は
確実に紅蓮に当たる

「・・・くつ、でも・・・ー！」

本音の攻撃に対しても簪は輻射波動を拡散状態にして打ち消そうとする

「あまいよーーー！」

本音はそういうと自身が持っていたショットガンを簪に向けて投擲
する

「！？・・・なんのつもり？」

簪は本音の行動がわからなかつたが投擲されたそれは輻射波動によ
り粉碎され爆発する

「・・・これはー！」

そつ

爆発したショットガンにより視界がさえぎられる
本音はすかさず次の武装アサルトカノンをホール

視界がさえぎられているものの本音は先ほどの位置からおおよその
簪の位置を割り出し撃つ

本音の予測はあたり簪は被弾する

「・・・やるね！本音・・・」

「ふふふ～わたしだってやればできるんだよ～

簪の言葉に対しても本音は血漫^{ザハ}に、誇りしづ^ハに答える
実際専用機を使っている簪に対して本音が対抗できるのはすうじこ
とである

いくら慣れていないとはいえ簪の紅蓮は世界最高

それに対して本音のほつは量産機

本来なら勝負にならないはずである

しかし実際はかなりいい勝負になつていて

「なら・・・これで…」

簪は近接用武装凹凸^{ウニコ}型特斬刀で切りかかる

「まけないよー！」

本音も近接ブレードを展開して迎撃に移る
二人は強烈なつばぜり合いお起こす

先に離れたのは簪

凶器型特斬刀を消して輻射波動での攻撃に移りつつある

「逃がさないよー！」

本音はそれを見逃さず五五口径アサルトライフルを開
簪ぬに向けて撃つ

突然の攻撃に対して簪は対応できない

「・・・ もや！・・・ ひ」

簪のシールドエネルギーはかなり削られる

本音はその間も武装を開いては撃ち収納しては展開し撃つ
その間はコンマ一秒にも満たない早業

”ラピッド・スイッチ”

本音はその技術を習得していた

絶え間ない弾幕に簪は攻撃する機会がなくひたすらにかわし続ける

簪のシールドエネルギーはどんどん削られていく

試合開始から15分

すでに簪のシールドエネルギーはつきかけていた

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

シールドエネルギーだけではなく簪の体力も限界に近かつた

絶え間なく襲い掛かる弾幕の雨

それをかいくぐり続けるのは容易なことではない

「いのままじや・・・負ける・・・」

簪は戦意を失いかけていた

嵐から専用機をもらつたにもかかわらず自分はそれを生かしきれていない

簪はわかつていた

自分の反応速度が紅蓮の反応速度に追いついていないことに

反応速度に体がついていけないこと

ふがいなさを感じていた

凪は自分を信じてこの機体をくれた

でも自分のせいでそれを生かせないでいる

そしていま・・・負けようとしている

いやだ・・・負けたくない！！

凪がくれたこの機体を生かせないまま負けるなんて・・・

私は・・・

負けたくない・・・！！

” 最適化完了 神経接続開始 操縦者認識完了 操縦者 更織簪 ”

簪が負けたくないと強くおもつたときそれに答えるかのように紅蓮が最適化を完了させる

本来 IIS とは初期化、最適化を完了させることで専用機になる

だがこの紅蓮は最初からそれが終わっている

では・・・なぜ?

『あ～簪 聞こえた?』

簪が疑問に思つてこると匂の声が聞こえる

「聞こえてるよ・・・で、なに・・・?」

『やひそり最適化が終わったと思つんだがどうかと聞いてね』

「最適化・・・? それは最初にする感じや・・・?」

匂は最初に初期化、最適化はすでにこいつでいた

ではなぜ今になつて最適化が終わつたなどとこいつのだひつか?

『あ～言葉が悪かつたね。システムがそれを簪を認識して簪用に書き換えらうかと思つんだ。いづなり最良化。で、どう?』

「それなら・・・今」

『やつか。やつかまでは俺を想定したものだったからたぶん反応速度が過剰すぎたと思おうが、それならそこが緩和されてるはずだ

』

「わかった・・・いくよ、本音・・・」

簪は確かめるべくサ再度本音に向かっていく

「忘れられてるのかと思つてたよ～・・・」

本音は先ほどから自分が余話に出てこないめ忘れられていたのではないかと涙目であった

それでも絶え間なく弾幕を張るあたりさすがだらう

だが先ほどまでとは違い最良化がすんだ紅蓮はそれを難なくかいくぐる

「す、じ、い・・・機体が・・私についてくる・・・・・」れなら・・・
いける！…！」

簪はやつせまでとは打つて変わり攻勢に出る

先ほどまでは違いスピードも動きの切れも各段によくなつた起動を本音追いつきれない

そして・・・

「はああああ！…！」

簪の右手が本音のシールドにあたり本音を吹き飛ばす

簪はそのまま輻射波導を長距離モードに変え収束させたそれを本音に向けて放つ

ふきとばされ動けなかつた本音はそれをもろにうつさる

そして本音のシールドエネルギーはつきた

『そこまで一勝者 簪!』

簪対本音の恋するおとめの対決は簪の勝利に終わった

結果

簪残りシールドエネルギー 5 6

かなりきわどい結果だった

本音も専用機だったら試合の結果は逆だつたかもしれない

思わぬところで本音の実力をみた貴重な試合だつた

「あれ?私の出番は?おねーさん泣いちゃうぞ?」

そういえばいましたね生徒会長

模擬戦 簡▽S本音（後書き）

はい、なんとこうかも「すみませんでした

なぜか書いてこらへに本音がなんか強くなりすぎた感があります

今後どうして行きつかいま思案中です・・・

感想などあつまつたら気軽に書いて下さー

ヒロインズ紹介（前書き）

今回はヒロイン達の紹介です

原作とは違う点があるので読んでみてください

イラストも描いていますが・・・下手です

ヒロインズ紹介

この作品では原作とは違う。原作ではわからないところを勝手に作っています

変更点

ISが登場した年

今から9年前で凧が6歳の頃

原作での一夏がさらわれたとされる時期なども今後変わる予定
作者が原作を読んだことがない上にアニメも流してみていたためこ
ういう設定になります

更識簪

> i 3 3 8 4 3 — 4 0 9 3 <

原作では姉にたいしてコンプレックスを抱えていたがその設定がない
専用機も自作していない
日本の代表候補生

布仏本音

> i 3 3 8 9 6 — 4 0 9 3 <

原作同様の設定だが若干性格が黒くなっている
笑顔での威圧が怖いです！！

更識楯無

> i 3 3 8 5 6 — 4 0 9 3 <

原作同様でロシアの代表候補生で専用機は「ミステリアスレディ」
だが

機体の整備、改良を凪に一任しているため原作よりスペックが高い
原作にあつた簪との確執はなく最近は凪に好意を寄せている様子
それゆえに若干簪との間に不協和音が生じることも・・・

オリジナル専用機紹介

「紅蓮」

凪が簪のために開発した世界最高の機体
全体的に赤く間接の部分が金色の全身装甲

右手に悪魔を思わせる大きな爪状の手が付いており左右対称ではない
ISの常識を覆す存在で初期化と最適化をすでに済ませていた（と
いうより其の概念が存在していない）

一次移行、二次移行などによる機体の変化および概念が存在しない
これは凪が紅蓮のコアを書き換えたためである
最良化という独自の進化方法を持ち使つたびに操縦者に合わせたプ
ログラムに自分で書き換える

特殊なAI機構”無段階移行機能”を搭載している
操縦者との同調率が上がるほど出力が上がる

現在の稼働率30%

武装

徹甲砲撃右腕部「輻射波動」

高周波を短いサイクルで対象物に直接照射することで、膨大な熱量
を発生させて爆発・膨張等を引き起こし破壊するというかなり強力

な武装

I Sにはシールドと絶対防御があるため直接的につかんだりすることはないが相手の刀剣などの武装に対し絶対的な強さを持つ輻射波動はビームのように遠距離への攻撃、ワイドレンジでの広範囲拡散攻撃、輻射波動砲弾を円盤状に収束させてカッターのように用るなどのバリエーションを持つ

本機最強の武装

「飛燕爪牙」

両肩にそれぞれ一機ずつ内蔵されている

別名スラッシュユハーケン

切断力に優れておりおもに接近にたいするカウンターなどに用いられる

近接用発展型ブレード「吼叫ノ型特斬刀」

近接用ブレードの発展型

切断力が従来のものよりも格段に強化されビームコーティングによりビームを切ることもできる

長さは従来のものよりも若干短く取り回しがしやすい

飛行ユニット「Hナジーウイング」「飛翔滑走翼」

本来ならエナジーウイングを使うはずだったが未完成ゆえに代用として飛翔滑走翼を装備

想定より劣るものそれでも現行のどのHよりも速い

対抗戦開幕と敵襲（前書き）

今回は正直いまいちなできです・・・

それと次の更新は早くても1~2月です

作者の学校で来週に微積のテスト

30日から中間があるためテスト勉強します

気長にお待ちください

対抗戦開幕と敵襲

あのクラス代表決定戦から早一ヶ月
代表にとつてははじめての仕事「クラス対抗戦」の日がやつてきた

俺たちのクラス1・1の代表は、不運なことに代表になってしまった男 織斑一夏

代表決定戦からのこの期間
どうやらそれなりに特訓はしてきたらしい

ただ・・・正直ものになつてているかはかなり怪しいといえるだろう

なぜならその特訓の相手が篠ノ乃箒とセシリ亞・オルコットの二人
だからだ

この二人、一夏にほれていらしく自分から特訓の相手を買って出
たらしい

それ自体はいいことだ

篠ノ乃是剣道の有段者

ISとはその特性上、操縦者には反射能力などが多く求められる
それゆえに剣道とはその反射能力、さらにいえば一夏の白式は近接
用に武器しかないとためそこで剣道は大きな力になるだろう

対してオルコットは射撃戦を得意とする”ブルーティアーズ”を専用機とする代表候補生

射撃武器使いということはそれだけその性質を理解しているということ

射撃武器に對してかわすしかない一夏はよりその特性を理解しなければならない

また、オルコットは代表候補生

一夏はISGが動かせるとはいえた完全な初心者

そういう面でもオルコットの指導は一夏のやくにたつだろう

・・・と本来なら喜ぶべき状況なのだが現実は違った

この一人は教え方が下手すぎると

篠ノ乃是なにやら擬音だらけでわかりにくく

といふかわからない

本人は自分の感覚を伝えるだけ

といふかそもそも篠ノ乃是ISを勵のよつなもので動かしている

つまりは何一つとして理解できていないので

それゆえにわかりやすく教えるなどできるはずもなかつたのだ

それに比べるとオルコットはまだわかりやすいのかもしれない

なのだが・・・」どちらもかなり問題がある

オルコットの場合は逆に理論的にISを動かしきっている
ISの理論、原理、そういうものを本当にそのままどうえ実践する

上昇、下降にしてもそれは同じで感覚的な表現、とはいえ篠ノ乃是
あまりにもあれだが、いいところまで理論的に解説してします

確かに間違つていない

一夏はISについての知識がありえないほど持つていな
確かに正しいのだが一夏に理解させるのは不可能だろう

織斑先生のせいなのかもしけないが一夏はここに入るまではISに

ついての情報は何一つ見せてもらえなかつたらしい

まあ、本人もそこまで興味はなかつたらしいが・・・

それゆえに代表候補生や専用機

そういうたこの世界においては常識といえることすら知らなかつた

・・・入学前に参考書を電話帳と間違えて捨てたのが最大の原因だが

と、そんなわけで一人の指導はあまり一夏には効果的ではないようだ

その証拠にこの前のIHSの実技授業

そのとき専用機持ちはIHSの展開、急上昇、そのまま下降し地上10センチのところでの停止について実技があつた

その実技において一夏は下降のとき見事に減速できずそのまま地面に激突

グラウンドにおおきなクレーターを形成したのだった

本人曰く「グッとする感じでやつたんだけどな・・・」などといつていただためやはり効果的ではないのだろう

え？その時俺はどうしてたのか？

もちろんこましよ授業に

鋼は調整中だったため実技には参加してなかつたけど

とまあそんな感じで一ヶ月は過ぎていった

その間に中国からの代表候補生がきたり、その代表候補生が一夏に幼馴染だつたり、それで部屋の問題が起きたりといふことあったらしいが俺は完全にスルーしておいた

自分の立てたフラグぐらい自分でなんとかしき

ところもあるがこまちゅもこまこまとやるこじがつた

クラス対抗戦

それはつまり各クラスの代表が試合を行うというものの
そして簪もクラス代表の一人に選ばれていた

そのため簪の機体 紅蓮 の調整をしなければならなかつた

模擬戦において最良化により簪の専用機になつた紅蓮だがまだ完全
ではない

わかりやすくいえばまだ最大稼動ができるいない

紅蓮は世界最高に能力を持つ機体

それゆえにその能力に操縦者が追いつけていないのだ

だからこそ凧はISコアを部分的に書き換え最良化という過程を書
き加えた

凧はISコアの解析はできていないもののそれが何であるかは理解
できていた

ISコアとはすなわち”人工頭脳”であると凧は確信した

初期化とは前の記憶を消去しまつさらな状況にする

最適化とは人口頭脳が操縦者を認識する工程

一次移行とは人工頭脳が操縦者を認めて進化を始めたということ

つまりは教科書などで教わるように操縦者とともに進化する

実際は操縦者の思考などを読み取り自我というものを形成し、情報を集め操縦者により近づくように進化する

それゆえに一次移行をした後の機体は操縦が楽になり能力も向上する

IIS「アとはすなわち人工頭脳なのである

とはいえないぜそのようなものがあるのか

どうやって作られたのか

「アの内部の情報は何一つとしてわかつていなかつたが・・・

紅蓮は完成した機体

もうこれ以上の進化はないといつ究極の機体だった

それゆえに進化は必要ない

だから凪は進化ではなく最良化を組み込んだのだ

そうすることことで紅蓮は簪の思考などをよみとりより適したシステムを構築する

そうすることで稼働率が上がり紅蓮は強くなるのだ

と、いったことをやつていたため凪自身の機体は完全に手付かずの状態だった

今俺はアリーナでクラス対抗戦を観戦している

右隣には本音、左隣にはなぜか樋無がいた

そんな両手に花な状況では当然周囲の視線を集めることなんか周りからかなり興味の視線やら嫉妬の視線やらを浴びてかなり俺は参っていた

・・・なによりきついのは

『そんなに・・・おねえちゃんや・・・本音が・・・いいの?』

とプライベートチャネルで話しかけてくる俺の後ろに立つる簪だった

正直これが一番きつい……

なにかいつとなきそりになるし……

はあ……なんでこいつなるんだ

俺がそんなことを考へていてこよにクラス対抗戦が始まった

今アリーナで対峙しているのは一夏と中国の代表候補生である鳳
なにやらやり取りがあるようだが遠田のためよくわからない

「ヒーロー……あれは青竜刀か?」

「たぶんそうなんじゃないかしら? データでは双天牙月ってなってるわ

青竜刀を一本くつつけたような武器が凰のHSの近接武器の様だった。

明らかに重いだろあれ……なんで片手で振り回してんだ?

鳳の攻撃を一夏は必死による

実際当たつたらしゃれにならんしなにより・・・

「あれが迫つてくるのは勘弁してほしいな・・・」

「おね～さんも同感ね・・・」

「わたしも～」

「私も・・・」

その長大さ、威力・・・視覚的迫力はとんでもないものだろう

しかも捌いてもすぐに次の刃が襲いかかつてくるという波状攻撃

一夏は鳳から距離をとる

だが一夏に機体で距離をとるのはむしろ悪手なんじゃないか？

すると鳳の肩のアーマ開き、一夏が目に見えぬ力を受けて吹き飛んだ

さらに目に見えない不可視の力が一夏を地表へと叩き付ける

「あれは・・・衝撃砲か？」

「ええ、おそらくはデータにある龍砲でしょうね。空気を固めて飛ばすから見えない上に稼動範囲に制限がないからビームでも撃てる

「一夏にとつてはかなりきついな」

一夏はなんとかそれをよけようとするが「じび」と吹き飛ばされてしまっている

たしかに見えない弾とこいつのは厄介だが……

「でも、かわす方法もあるんだがな……」

「確かにね。でもそれを氣づくかしら?」

「氣づかなければ負けるだけだ」

「結構冷たいのね? おねえさん驚いわ

楯無は対して驚いた風もなくいつその際体を密着させてきたため左の本音からは腕をつなられ後ろの簪からは強烈なけりをもらつた

・・・俺悪くなくね?

そんなこんなしているうちに状況は動いた

一夏は衝撃砲の攻略法を見つけ出したらしい

衝撃砲はもつひとつんどんと当たらなくなってしまった

だが鳳も代表候補生

衝撃砲を攻略されたとはいえ以前優位は揺るがない

すると一夏と鳳は一度空中でとまつなにやり取りをしていった

俺を含めなんだ?と思つていると突如一夏が視界から消えた

一夏は爆発的な速さで鳳に向かっていく

突然の事態に鳳が対応しようとするがそのときにはすでに一夏は鳳の懷にもぐりこみ雪片を振り上げていた

これはきまつた

誰もがそう思いおれ自身一夏の勝利を確信した

だが突如アリーナ全体を揺らす巨大な衝撃、遅れてやつてくる破壊音がアリーナに響いた

「これは・・・」

「ええ、敵襲のよつね」

「ほんとだ~」

「でも・・・なんでこのタイミングで・・・?」

狙つたとしか思えない敵の襲来に簪は疑問を覚える

「おそらくは狙つたんだろう。今日は対抗戦だからな。データを取るなりするなりのタイミングだつ」

「私も同意見ね。で、どうするの?」

「どうあえずは様子見だな。楯無はいつでも出れるよつて待機しておいてくれ」

「あら? いきなり私を出すのかしり?」

楯無はいきなり自分を出すといつ風に疑問を持つ

「ああ、もしものときはお前が出るのがベストだ。それにまだ俺の機体は戦闘が困難だし敵がわからない以上紅蓮は出せない。悪いな、簪・・・」

「わかった・・・」

「うして対抗戦は思わぬ展開へ進んでいくのだった

金剛農田の手記（前書き）

なぜだらう・・・執筆している自分がいる
テスト死んだかな

アリーナは騒然としていた

クラス対抗戦の最中に突如乱入してきた全身装甲のIIS
全身装甲のIISは嵐ので一度見ていたためそれ自体にはおどろかな
つた

驚いたのはそのIISの持つている異常なまでの火力だ

そのIISはアリーナのシールドを破壊して進入してきたのだ
このアリーナのシールドは嵐の鋼の拡散層転移砲を受けても破壊ま
ではいたらない強度を持っている
それゆえに驚愕したのだ

まあ、ここに驚愕もしていなければ関心もあまりなさそうな者たち
もいたが……

「それにしても全身装甲とは……なんかパクリじゃないか？俺の」
「まあまあ、そんなことは気にしちゃダメよ？」

「嵐のやつのほうが……かつこいい」

「そへだよ～」

嵐は全身装甲の敵IISを見て愚痴りそれを回りが慰める

ちなみに上から順に、鳳、櫛無、簪、本音の順である

周りは騒然としていて教師陣が避難誘導をしている

みんな混乱状態でなかなか避難が進んでいないようだ

アリーナでは進入してきた敵ISとそこで試合をしていた一夏と鳳が戦っていた

当人たちにも避難命令が出ではいるようだがどうやらその気はないらしい

というより見た感じ敵ISに一人がロックされているらしく逃げられないのだろう

さらにいえば進入する際敵ISが破壊した遮断シールドは再展開されておりそのレベルは4

アリーナへと続く扉もロックされているらしく教師陣も進入できず

にいる

つまり一人は強制的に戦わなければならぬ状況を作られているのである

しかしこれはなにか作戦的なものを鳳は感じていた

鳳ほどの能力を持つてすれば再展開された遮断シールドを破壊することもロックすることも可能であった

一夏たちを救出することも容易であった

だが凪はそれをしなかつた

「これは・・・狙いは一夏か俺ですね」

そう、凪は今回の敵襲は一夏が自分の機体データ、戦闘データだと踏んでいた

そして今回の犯人はおそらくは・・・

「なんでそう思うのかしら？」

楯無は凪の発言に疑問を口にする
ちなみに本来ならば彼女も避難の誘導および自体の収集に動かなければならぬのだ
だが楯無はまだ凪のそばにいた

「簡単な話だよ。俺は機体のデータをどこにも提示していない。知つておるのはお前たちと倉技研の一部の人間のみ。データをほしがるのは当然でしょう。一夏はブリュンヒルデの弟、戦闘データはなんとしてもほしいだろ？」

「なるほどね～だから出ないんだ？」

楯無は納得したように言つ

「そういうことだよ。それに今回の犯人のめぼしあついてるしな

凪はどこかあきれたような口調で言つ

その表情はなんとも微妙な表情をしていた

「誰・・・なの?」

簪はわからないようで凪に聞く

本音もわからないといった表情で凪の返事を待つている
楯無は予想がついているようだったが

「おそらく今回の犯人は 篠ノ乃束 だろ?」

凪は答える

「えー?」「

「・・・」

簪と本音は驚いたような声を上げ楯無は無言で話の続きを促している

「だつてそういう? I Sには必ずコアが必要になる。コアの数を複製できない以上コアは非常に貴重なものだ。それを偵察用に、しかも”無人機”を使ってくるなんて正気ではないよ

「無人機・・・?」

「それは本当なの！？」

簪は明らかに驚いたような表情で
楯無は珍しく声を荒げる

「気づいてなかつたのか？あれ、攻撃するときのモーションがミリ
単位で同じだよ。生体反応もないしな」

「でもエスは人がいないと動かないはずじゃない？」

楯無は当然の疑問を口にする

そう、エスは人がいなければ動かない

それはエスにおける常識

エスはあくまでもステッツであり動かすのはあくまでも人間なのだ

だから普通の人にはその発想はできないのだ

この発想が可能なのは匪のように常識を超える考えが可能な人物か

一夏のような馬鹿だけだろ？

「織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！…すぐ
に先生たちが工事で制圧に行きます！」

プライベート・チャネルを使って山田先生は一人に対して避難の指
示を出していた
しかし一夏たちはそれに従わない

「え、 戻り止めるって…・・・織斑くん！何を言ひてるんですか！？」

山田先生はプライベートチャンネルにもかかわらず叫んでいる
どうやらかなり余裕がないらしい
「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあつた
らどうするんですか・・・つてもしもし！？もしもし！？」

「もしもしー？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！
？」

「山田先生、どちらにしても無駄だ」

「無駄つて織斑先生！？」

「いいからこれを見る」

織斑先生はブック型端末の画面を数回叩き表示されていた画面を切

り替える

「遮断レベル4に設定・・・のみならず扉までロックされて・・・まさか！？」

「そうだ・・・あのIISの仕業でまず間違いない」

「織斑先生、避難に向かった先生方も、扉のロックによつてアリーナに入ることが出来ないと・・・」

「・・・これでは避難することも救援に向かつこともできないな」

織斑先生ら教師人はすでにどうすることもできなくなつていた
本人らに任せることにしたらしい

まあ、冷静のように見える織斑先生だが内心はかなり穢やかではな
いようでコーヒーに間違えて塩を入れてしまい山田先生にからかわ
れていたが・・・

アリーナではいまだ敵IISと織斑たちとが交戦しており廻たち4人
はそれを見守つていた

どうやら織斑たちはあれが無人機だということに気づいたのか動き

に迷いがくなつていた

織斑の専用機”白式”の最強攻撃方法”零落白夜”

それは人間に向けて使うときは全力で使うことはできない

なぜなら零落白夜はISの絶対防御をも無効化する
つまりは肉体にたいして直接攻撃してしまう

命を奪いかねない危険な技だ

だが、無人機なら話しは別

全力で攻撃することができる

どうやらなんとか一夏の一撃を入れるとこうことを狙つたいのうだ

このままなら問題なく片がつくな

凪がそう思つたとき事態は急変した

『遮断シールド解除』

「な！？」

なんと突如アリーナを覆つっていた遮断シールドが突如解除されたのだ
アリーナ内にはまだ生徒が残つている

遮断シールドのせいで突入できなかつたが逆にあちらからの攻撃や
流れ弾から生徒たちをまもる壁にもなつていた

だからこそ凪も事態を見守ることができたいた

だがその壁が解除されてしまった

「どうやら……なんとしても俺のデータがほしいらしいな」

凪はこれが篠ノ乃束だけの仕業ではないのではないかと考えた
篠ノ乃束が犯人だといった凪だが本心では違和感を感じていた
こういつては何だが篠ノ乃束はどこか自分に似た思考をしている節
があつた

それなら今回のことは疑問が浮かぶ

そり、あまりにも醜いのだ

今回のＩＳはあまりにもお粗末過ぎる、醜いといつてもいいほどに
使われている技術は正直わからないが動きのパターンがわかりやす
い上に応用もできていない

そう、ただ無人で”動くだけ”なのだ
コアを作れるのは篠ノ之束だけ

つまりこれを作ってのは間違いない篠ノ之束
今回の件にかかわっているのは間違いない
だが・・・首犯は彼女ではないな
今回の犯人はおそらく・・・

「まあいわよ・・・このままだと無関係の生徒に被害ができるわ・・・

」

楯無はあせりながらいつ

「・・・凪・・・どうするの？」

「なつちゃん・・・」

簪と本音は不安そうに匪に聞く

匪はすこし考えていくようだ

(「のままだといひるとまずいな。でも俺の機体はまだ飛行ユニットが未完成だし・・・簪をだすか?」

いやだめだ。まだ簪の機体をさらすわけにはいかないし何より相手はおそらく「国企業だ。最悪技術が流用 される危険性もあるな・・・

なりどりする?」)で最善の手は・・・)

「櫛無」

なぎは考えがまとったのか櫛無を呼ぶ

「?なにかしら?」

櫛無は自分が呼ばれるとは思つていなかつたのかすこし驚いたように答える

「ひなつては仕方がない。俺の機体はまだ飛べない、だが簪の機体のデータを取らせるわけにもいかない」

「じゃあどうするの?」

「櫛無が無人機の撃墜、俺が遮断シールドの変わりに守護領域の広域展開で生徒を守る」

「でも……それだと……嵐が……」

嵐の作戦に簪は意見する

意見するところよりは純粋に嵐の身を察じている

嵐の絶対守護領域は計算により成り立つ

広範囲に展開するならなおのこと

そしてその演算は当然嵐の身にも負担がかかる

「だから櫛無に出てきたりなんだよ。まあならあんな無人機じとき瞬殺できるだろ?」

「うへん、おねえさんでもできなことはあるのよへ

「やうだな、料理とかな WWW

「うへつそれはいわないでよ・・・・・

嵐は櫛無の唯一の欠点を突く

「おねえちゃん!・・・・・

そんなとき急に簪が姉である櫛無を呼ぶ

「…なにかしりっ・

急に呼ばれた櫛無は驚いたようだ

それだけ簪が声を張り上げるのは珍しいことなのだ

「おねがい・・・凪に負担をかけさせないで」

それは簪の心からの懇願であった

「お願い・・・」

「・・・わかったわ。なつちゃんの負担が最小限ですむように瞬殺していくわ!」

簪の珍しい頼みが凪のことであつたことに不満がないわけではないが、凪に負担をかけるのは樋無も許せるものではなかつた

「じや、頼みますよ」

凪はそのまま自身の専用機 鋼 を展開する

「いくわよ、ミステリアスレディ」

それをみて樋無もヒロを展開する

本音と簪は凪の後ろで事態を見守るようだ

それは自分が今回の件にかかわれないふたりのせめてもの行動であった

激突！！樋無VS無人機（前書き）

今月最後の更新です

いま留年の危機なので忙しいです・・・

そしてできもいまいちという・・・

はあ・・・

激突！！楯無VS無人機

アリーナにでた楯無は凧の指示通り敵I-Sを破壊するためにはまずは交戦中に一夏と鳳のところに向かつた

いきなりの遮断シールドの消失に加え突如現れた楯無に一人は驚いていた

「今度は何だ！？」

「だれよ！あんた！」

事態が自体だけに二人にはすでに余裕がなくどうもけんか腰になってしまっている

だが急いでいる楯無はそんなことを完全に無視した

・・・いつも他人のペースに合わせない彼女ではあるが

「二人は今のうちに避難しなさい。ここからはおねーさんがやるから」

どこか余裕のある口調で二人に避難の指示を出す
だが二人はそれを聞き入れられない

「でも……」でひいたら

「そもそもいきなり出てきてなに命令してんのよ！」

聞き分けのない二人

実際今まで交戦していたのは自分たちなのに後から現れた樋無に命令されるのは尺に触るのだろう

だがそれは子供のわがままでしかない
今は非常事態

必要になるのは冷静な状況判断力と・・・

「はつきり言つた。足手まといだから下がりなさい。じゃまと」

確かなる実力である

いくじアリコンヒルデ 織斑千冬の弟であつとも

いくじ中国の代表候補生であつとも

今この状況においては力不足であった

どれだけ訓練していよければ所詮競技として出しがない

だがこれは実戦

命がけの戦闘だ

それゆえに聞き分けがないのなら強制的に排除するだけ

「そり・・・仕方ないわね」

楯無はそりつぶやくと一人を強制的にアリーナの観客席に向けて吹き飛ばす

当然観客のいないところにだ

「なつちゃん 完了したわよー。」

凪無は一人を強制的に退避させると凪に向けて言いつ

「確認した。 絶対守護領域広範囲展開開始」

凪は楯無の報告を聞くとすぐさま守護領域を展開する
いつもは自身も周りにしか展開しないが今回は遮断シールドの代わり

それゆえに遮断シールドと同じ範囲で展開する

アリーナを観客席を守るように桃色の守護領域が展開される

「そりすがなつちゃんー。」の範囲で本当に展開できるなんてね

楯無は感心したように凪の行動について一人ごちる

「そんなことよつそりとそいつかたづける。あまつ長くは持たん
ぞ」

凪のそりと倒すよう促す

ここまで広域で展開すれば凪自身にかかる演算による負荷は相当なものがある

機体はともかく凪の脳には処理限界があるためそれを超えての展開はできない

展開されている守護領域が解ければ観客席はむき出し

そうなれば無駄な被害ができる

そつなる前に敵IJSを倒さなければならぬ

ゆえに急がなければならぬのだ

「わかつてゐるわよ。じゃ、行きましょうか」

楯無はそういうと自身の近接装備 大型ランス蒼流旋 を構えながら敵IJSに向かっていく

蒼流旋は表面に超高周波振動の水を螺旋状に纏つており先端部分がドリルのように回転する装備

さらには内部に4連装ガトリング・ガンを内蔵している

非常に強力な装備である

楯無は高速で接近すると迷うことなくそれを突き立てる

「へりいなさい」

突き立てたそれをさらに突き刺しながら内蔵されたガトリング・ガンを発射する

突き立てられた敵IISの左腕は爆発する

もし人間が乗っていたならすでに致命傷だがやはり無人機

破壊された左腕からはコード用名ものが見えておりショートした回線が紫電をあげており損傷の具合を物語つている

「まずは左腕、いただきね」

楯無はそういうとそのまま右腕も破壊しようと再度接近する

だが敵IISもそれを迎え撃とつとその長い腕を勢いよく振り回す
だが楯無はとまらない

ガツキイイイイイイイー！

敵IISの腕が楯無を直撃する

普通なら非常にまずい一撃だが・・・楯無のミステリアス・レイディには効かない

ミステリアス・レイディ通称【霧纏の淑女】

ロシアの第三世代型IIS

以前は「モスクワの深い霧」と呼ばれていた機体
アーマーは面積が全体的に狭く小さい

それをカバーするように透明の液状フィールドが形成されている
水のドレスのようになつてゐるそれはナノマシン制御によるもので
ある

それは攻撃にも防衛にも使うことができる非常に汎用性が高い
今回はそれを自機にまとわせていたのだ

それこそドレスのよう

だから敵ISの一撃を意にも返さない

だが当然それにも耐久限度は存在する

そして楯無のミステリアス・レイディのデータはすでに取られている
敵ISにもそれはインストールされていたようだ

敵ISはナノマシンを越えて攻撃するために自身の最強攻撃である
ビームを放つ

これは遮断シールドすら破壊するほどの威力

これを食らえばひとたまりもない

だがそんなものがあたるような腕を楯無はしていない

突然ノータイムで放たれたそれを難なくよける

よけられたそれは守護領域に当たる

守護領域といえども突破されかねない威力ではあるが凪は演算によ
り一極集中で強度を上げそれを無効化する

「あぶないわね～でもおねえさんには当たらないわ」

そういうと櫛無は敵IISから距離をとる

当然相手はそれを追撃するために再度ビームを放つが櫛無には当たらない

しばらく回避を続けていた櫛無だが突如空中で静止する

「じゃ、これで終わりにしようかしら」

櫛無は待っていた

先ほどから回避しながら待つたいたのだ

この技を使うために

”清き熱情”

密閉空間において、水のヴェールを濃い霧状にして充満させ、それを一斉に熱に転換し、対象物を爆破する能力

ミステリアス・レイディの特徴である水操の能力の集大成ともいえるそれは言うならば時限式の爆弾のようなもの

その威力は絶大

なにより先ほどの一撃に加え一夏と鳳との戦闘によりかなりダメー

ジを受けていたため食らえば間違いなく即死

「じゃあね。清き熱情」「

そして楯無は爆発させた

もうすでに食らった敵I-1はそのままアリーナの地面に落下しそのまま機能を停止した

「ん～～勝ったよ！～なっちゃん！」

楯無は完全にそれが機能を停止したのを確認したあと再度攻撃をし完全に動けなくしてから凧にアピールする

「ああ、よくやったよ。でも、一撃で決められなかつたしづいぶんと流れ弾を飛ばしてきたよな？」

「うう・・・それは」

「かなり大変だつたぞ？演算するの」

「うう・・・」

凧からの指摘にたいしてうなるしかできない楯無

そこに援護射撃が加わる

「凧・・・苦しそうだった・・・」

「かつ、簪ちやんー?」

「なつちやんつひりだつとよ~」

「本面ちやんまで・・・」

もつなかわづな櫛無

「ま、いいよ。あれは倒せたんだしな」

「そりだね・・・でもなんで今回は私・・・出をなかつたの?」

「わついえばなんで~」

「・・・」

嵐が話をまとめようとすると今回嵐の指示によって参戦できなかつた簪が疑問を口にする

「まあ、こらいろと理由はあるんだけど、最悪の事態に対する備えと対策のためかな」

「それって・・・どうして・・・意味?」

「今回の襲撃だけどどうやら犯人は篠ノ之東だけじゃなさそうなんだ」

「ー?・・・でもさつきは篠ノ之博士が犯人だつて・・・」

先ほどの見解と異なることをこつなぎに對して簪は疑問を覚えた

「たしかに彼女も犯人、というより今回の騒動に絡んでるよ。コアを作るのは彼女だけ。調べないとわからないけどおそらく無人機に使われているコアは未登録のもののはず。そうなると彼女が関係しているのは間違いない」

「でも、それだけじゃないんでしょ~？」

「ああ、おやらく今回の主犯は……”亡国企業”」

「「「…………?」」

「やつぱりね……」

「楯無は予想できたみたいだが、そう考えると納得がいくんだ。今回襲撃のタイミング、無人機、そして遮断シールドの強制解除。どうも篠ノ之博士にしてはやりすぎだし最後のに関してはやる意味がない」

「そうね、あの人は他人に興味がないようだけど逆に妹には甘いみたいだし」

「どこの誰かさんもだがな」

「うつー。」

楯無の発言に「お前もだろ」というコアンスで返す凪妹に甘い、というか弱いのは一人とも同じである

「あの時アーナの観客席にはまだ篠ノ之簣がいた。わざわざ危険にさらすような行動をするはずがないんだ。それにあれははつきりってコアのなりそこない。本来のコアに比べて性能は各段位低い。彼女がそんな粗悪品を使うとは考えにくい。彼女じゃないなら誰が黒幕なのか・・・そう考えれば答えはひとつしかない」

「「「」国企業・・・」」

「まあ、証拠はないんだけどね~」

「むしろ証拠はなくとも予想はできる。もし違つたとしても簪の専用機のデータはなるべくさらすわけにはいかない。相手がわからないうのなら切り札は隠しておかないとな」

「切り札・・・?」

簪は自分が切り札といわれたことに疑問を感じているようだ

「紅蓮は世界で最強。それだけの技術とポテンシャルを持っているよ。今はまだ稼働率が30%程度だが完全稼動すれば世界で紅蓮に勝てる機体は存在しない」

「実際紅蓮は脅威なのよ。更識としてもなるべく情報が回らないよう徹底しているわ。だから簪ちゃんもむやみに展開しないようにな?」

楯無は暗部組織の長としての表情で簪に言つ

「・・・わかってるよ・・」

簪も自身の機体についてわかっているので納得する

「まあ、校内の行事での展開は別にかまわないよ。でも今回のよう
な敵の実態がわからないときはなるべく展開しないよつこね？」

「うん・・・」

「じゃあ～そろそろ後始末もかねて生徒会室にいこ～

先ほどまで話に出てこなかつた本音が提案する

やはり本音は癒しの天才である

すこし張り詰めた空気だったこの空間も本音の一言でその空気も霧
散した

のほほんとしたあだやかな空氣になる

その後生徒会室に向かつた4人だがそこで待つっていたのは書類の山
とこめかみをぴぐぴぐさせた虚であつた

その日は生徒会室の電気が消えることはなかつたそつた

ガールズトーク（前書き）

なぜだろう・・・

テスト勉強そっちのけで書いている自分がいる

・・・この話投稿したら本気出す！

それと最近お気に入り件数が減りました

もしかして面白くないですかね・・・？

ガールズトーク

クラス代表対抗戦になぞの無人機が乱入しそれを撃退するというなかなかにハードな一日を送りその後事後処理のために生徒会室でのまま次の日を迎ってしまった凧、簪、本音、楯無、虚の5人は今凧たちの部屋に集まつたいた

ことの発端は先日の無人機による一軒

それに対する事後処理の最中に今後について対策を練る必要があるということになった

本来ならそのまま生徒会室でしてもよかつたのだが5人は徹夜状態しかも凧は守護領域の広域展開の際に脳をかなり酷使しているためかなり限界状態であった

そんな足元もおぼつかない凧の状態をみて簪が休むように提案

凧は拒否するが簪の涙による無言の圧力よ楯無らからの「空氣よめ」という視線を感じ仕方なく自室で寝ることにした

自室に戻るのも限界で困難な状態であった凧は自分と同室の簪と本音に肩を貸してもらいながら自室に向かつた

ここまではよかつたのだが・・・なぜか楯無たちもついてきた

いわく

「なつちゃんが休むならついでに私たちも休みましょうか。そうだ！どうせならなつちゃん達の部屋で休みましょうか。それならそのまま作戦会議もできるし…」

とこう橋無の発言により強制的に凧たちの部屋が作戦会議の場になってしまったのである

ゆえに今凧の部屋には先ほどの5人が勢ぞろいしていた

「凧・・・よく寝てるね」

凧は部屋にたどりつくと着替えることもなくすぐに眠ってしまった
それだけ守護領域の広域展開による演算の負荷が大きかったのだろう
そんな凧の寝顔を見ながら簪は言つ

その表情はいつも周りにたいして向けることにならないとても穏やかな
表情だった

「やつぱり～かわいいよね～」

本音は寝ている凧の頬をつつきながら言つ

いつもはどこか気を張り詰めているのか無防備な表情を出すことの
ない凧だが寝ているときの表情はとても穏やかだった

「ダメよ本音。寝ているのを邪魔してはいけないわよ」

虚はそんな本音の行動を注意するがその表情はとても穏やかでいい

もの周りに見せていいできる女性の表情ではなく純粋な姉としての表情だった

「ん~でも~かわいいよ?」

本音はまたつつきながら言ひ
本音は凧の本質をすこしであれど理解してこるのでいつこつた表情
はうれしいのだろう

「あらあら、本音ちゃんたちやんにメロメロね」

楯無はそんな表情をしている凧と本音を見ながら言ひ
どこからかつていてる表情であったがどこかつりやましそうでもあ
つた

「本音・・・凧が・・・おきあやひ」

「じゃあ~かんちゃんも~おわれば~」

簪は本音を注意するがやはりその表情はやわらかかった

本音はそれなりに簪も触ればいいだらつと提案する
「えつ・・・でも・・・・・・」

簪は一瞬ためらつが自分も触ることにしたよつだ

基本的に奥手である簪はいつも恥ずかしくてそのよみなどせで
きないのだ

「やひつ・・・かわこ・・・」

簪も本音と回じようつきながら言つ
うれしそうな顔をしてこの簪を見て櫛無はうれしそうだが悲しそう
な表情をする

「お嬢様、くわいになら自分も触ればここではないですか?」

「えー・こ・せ、でもそんなこと」

「こつもあれだけスキンシップをしてくるのですからこまかひ遠慮
する」となどないのです?」

「こや、でもね! ? かんちゃんがこるし・・・寝てこらなつひちゃん
の表情かわいい」

「はあ・・・」

いつもおねえさんとこつ立場からスキンシップをしてくる櫛無ではあるもののこには簪がこの前でだらしない表情を見せるわナには・・・それに寝てるときのなつひちゃんかわいいし・・・

「あ、私じつすれば! ?

「お姉ちやんは・・・困のことあなの・・・?」

「えつー・?」

突然の簪からの指摘に驚く楯無

「お姉ちゃん……いつもよつづれしそうだから……」

そつ

楯無はいつもより機嫌がよかつた
なぜならここには凪の部屋

正確に言えば凪たちのへやではあるが

自分が好意を抱いている人物が日々生活している空間

そこに入れるというのは楯無にとってうれしいのだろう

生徒会長である彼女ならいつもは権限だとかでよくずかずかと人の部屋に侵入するのだが

ここには妹がいる

なのでなかなか近づけないでいたのだ

いくら妹との関係がギクシャクしていないとはいっても、これは自分的にもプライベートでなかなか難しい問題なのである

妹である簪が凪のことがすきなのはどうから見てもばればれである

凪の前ではいつものクールさを發揮できずじどりもどりになってしまふ様子を見ていれば誰でもわかるだろう

まあそれは楯無本人にも言えることなのだが……

楯無はいつもお姉さんキャラで通している

それは楯無としてに外向きの顔

誰にでもどこかなれなれしくそれでいて誰に対しても遠い位置に自分を置く

いうなら八方美人

ちなみに凪も外向きにはかなりの八方美人な性格を見せている
凪はどこかこの世界に対してあきらめている節がある

そんなところが自分と近くて親近感を楯無、いや風音は感じていた
それがいまの恋心に変わっていたのであった

いろいろとこいつたがようは楯無は恥ずかしいのでいろいろと理由をつけて凪の部屋にいけないでいたのである

「そうね……うん、私はなっちゃんのことが好きよ」

どうせ見抜かれているなら真実を話したほうがいいと判断した楯無口調にそいつもどおりだが表情は年相応の恋する乙女であった

「そう……なんだ」

簪はその楯無の返事を聞くと少し落ち込んだように見えた
ちなみに簪も姉が凪のことを狙っているのを知っている

「かんちやん?」

そんな簪の様子を気にかける楯無もしさ自分はなにかまずいことを言つたのかと不安になるが、その心配は杞憂であった

「私も・・・凪が・・・好きーだから・・・お姉ちゃんでも・・・負けないーーー！」

簪はベッドから立ち上ると姉に向けて宣言する

楯無はそんな簪の行動に驚いたがふと表情を緩める

「せつ・・・でもおねえちゃんも負けないわよ？」

簪は今まで内氣でない罰的であった

どこか自分の意見を言えないところがあった

いつも周りに流されて結局自分の意見を言えない

流れに逆らう姿勢を見せながらも結局は飲まれてしまつ
簪はそういう女の子であった

でも今その簪が自分に向けて大きな声で宣言したのだ
いつもの内氣な姿勢はそこにはなかつた
だからこそ楯無もそれに答えた

「むへ～わたしも～好きなんだよ～？」

そんな一人に今まで凪のほおをつづいて遊んでいた本音が乱入する

ちなみに実のところこの二人の中で一番風についてわかつているのは実は本音だつたりする

従者という立場上周りを見ることが多いからか本音はその風の根幹にある思いに気づいている

いつもはかなりぽわぽわしているが・・・

「本音も・・・なんだ・・・?」

「やへだよ〜これはかんちゃんでも譲れないよ」

いつも物事に対してもどこかふわふわしていて流されている本音だが
風のこの件に関しては引く気はないらしい
そのために本音は力をつけたのだから

「じゃ、これから私達はライバルってことかしらね〜?」

楯無が笑いながら一人に問いかける
ふたも笑いながらそれに答える

「「どうせん(だよ〜)」」

「あら〜ら、なんか二人はチームみたいね〜ここは虚は私に協力しないかしら?」

息がぴつたりな簪と本音の様子をみてそう思つ楯無

「遠慮させてもらいます。それと・・・大変言いにくいのですが

ことわると同時に虚はど〜か言いにくそつに言葉をとめる

それはいつもの彼女らしくなかつた

「どうしたのかしら？」

「その……凪さん起きていますよ?」

「「「えー?」「」」

三人完全に息が合つ

「よつ、つかす」しつるさ「ぞ」

そもそも凪が寝ている横でこれだけ話していればいい加減おもると
いうものだろう

本当は結構前からおきていたのだが内容が内容だけにいままで起き
だせなかつたという
のが凪の本音だったが

「もしかして……聞いてた?」

おやおやおやおや櫛無が聞く

いつもの彼女ならあわてることもなかつたし凪が起きていることに
気づかないこともなかつたのだが

今回は会話の内容ゆえに完全に注意力が散漫になつたいた

どんなにとりつくろつたところで所詮はまだ17歳
乙女なのだ

「まあ、あれだけ横で話されればね」

「どうしてから聞いてたの？」

「簪が「私も・・・凪が・・・好き!だから・・・お姉ちゃんでも・・・負けない!」って言ったあたりから

七
卷之三

自分の告白を聞かれていたことをしり顔を真っ赤にしてしまう

「なんというか・・・みんな俺なんかを好きになってくれたのほう
れしいよ・・・でも」

「でも、なんなの？」

「俺は人を好きになることがよくわからないんだ」

とか困ったよ、ほんの表情とかかわひしけた

「好きになる、それは好意を寄せるということ。でも好意にもいろいろな形がある。だからよくわからないんだ。もちろんお前達は俺の中でも特別だよ。でもこの感情がなんなのかよくわからないんだ」

「そりゃ、なんだ。でもおねーさん達のことは嫌いじゃないんでしょ？」

「ああ、嫌いなはずがない」

「じゃあ、チャンスはあるわけね」

「私は必ず、なつちやんの気持ちを奪つて見せるわー。」

「それと樋無は風に向かって宣言する

樋無のその宣言は少し驚く

だがそれにかられるように簪と本垂も宣言する

「わた・・・わたしもーあめりめないかい」

「わたりもだよーなつちやんをぱつちやーしちよー

そんな純粋に自分に向ける好意に風はあたたかさと心地よさを感じていた

「ありがとう。必ず答えは出す。なにも言わないことだけは絶対にない。だから・・・」

そこで一度言葉を切る風
そしていつも続ける

「それまで待つていてほしー」

その風の言葉に三人は迷うことなくいたえた

「「「もひりさん」「」と

金と銀の転校生（前書き）

明日でテストが終わる・・・

いろいろな意味で・・・

金と銀の転校生

あのあと今後の対策を練るはずの集まりはガールズトーク + 僕の構図のお話会になってしまった結局とくに何も話はできなった

まあ、情報が少なすぎるため今のところは相手の出かたを見ながら情報を集めるしかすることができないのが現状

それがわかっているので虚もそれをどうめることなくむじろ自分もその話の輪に入つていったのだろう

しかしああ、やつぱり暗部に族しているたはいえみんなやはり年頃の女の子なんだなと思う

いつも部屋も教室も同じな本音はともかくとしても

生徒会長にして現楯無である風音も、いつも完璧な虚もああして話しているところにいたるみんなとなんら変わらない

ああ、簪はどうのかつて？

わざわざから俺のそばで赤くなっていますよ

どうも先ほどの自分の言葉を冷静になつて振り返つてみて恥ずかしくなつたらしい

なのでいまは話の輪から外れて俺のそばにいる

俺はもちろん最初から輪に加わる気はないよ？

だって俺男だし

なんか加わると面倒だし

主に風音が面倒だからな

そんな感じでその会は夜遅くまで続いていた

なぜか毎晩を食べた後も俺の部屋にあつまり夜ご飯の後もなぜか俺の部屋に来ていた

まあ、最近は妹となかなか話せていなかつた姉同士

それ、いろいろと話すことがあるのでどう

あれ？俺もしかしてお邪魔虫？

・・・はあ

時は流れてある日のH.R

「シャルル・デュノアです。フランスから來ました。」この国では不

慣れな」とも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

転校生が2人やつてきた

「お、男……？」

誰かがそうつぶやいた

そし
なれどその軒標生の二女中の一人は

”男“たったのた

—はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

シャルルが自己紹介を続けようとするが俺は次に起るであろう事態に備えてポケットから耳栓を取り出した

「那...」

۱۰۷

さて、この耳栓をはめて、と

גָּדוֹלָה מִתְּבָרֶךְ יְהוָה בְּנֵי־יִשְׂרָאֵל

「この衝撃波に備えないと
周りを見ると一夏は耳をふさごいたがどうやら意味がなかつたよ
うだ

となりの本番は・・・

「へへへへ」

・・・寝ていた

この中寝ていらるるとま、なんともかういことだ
ところかいいのか寝てて・・・

「男子一 三人田の男子一」

「しかもつむのクラス！」

「美形！ 守つてあげたくなる系の！」

「お母さんありがとうー今度の墓参りには草以外のものあげるね
ー！」

なんとこつか・・・ついで

興奮するのはわからぬもないのだがこれはさすがに度を越えてい
それと最後のやつ・・・もう少し死者に敬意を払えよ
かわいそつだら・・・

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生が心底つむつたそりこり

織斑先生といえどあの衝撃波は応えるようだ

「畠さん、まだ自己紹介は終わってませんよ～」

山田先生がなんとかクラスをまとめようと/orするこの状況でもまとめようとがんばる姿はまさに教師の鏡だろう

ところが担任仕事しろよ・・・

その当の本人は口を開かないでただ一点...織斑先生だけを見つめている

「.....挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生の言葉にまるで軍隊の上官にに対するよつて返事をする転校生その教官と呼ばれた本人はこれまた心底めんどそつに額に手を当てながら言つ

「(イ)Jではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、(イ)Jではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

織斑先生に(イ)J返すと前を向き自己紹介をはじめるが・・・

「ラウラ・ボーデヴィッシュだ」

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

なんとも短かつた

ところがあの目は完全にこのクラスの人間を見下している

完全な侮蔑の視線を送っていた

なんとも生意氣といふか身の程知らずといふか……

こいつ「ラウラ・ボーデヴィッヒ」については事前に樋無のほうから報告を受けている

ドイツ軍特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』

通称『黒ウサギ隊』の隊長

とのことだ

そのほかの詳細な経歴もあつたが正直興味ないのでスルーしていたので覚えているのはそれだけだ

それにしても「ウサギ」って

なぜかウサギといわれるとあの大天災「篠ノ之束」しか出てこない
のだが・・・

ネーミングセンスwww

あれ、俺こんなキャラだっけ？

「！ 貴様が 」

ふとボーデヴィッシュは一夏を見つけるとそのままつかつかと歩み寄り・・・

バシンツー！

「……」

「う？」

強烈な無駄の無い平手打ちを一夏に食らわせた

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

認めるも認めないもお前にその権利はないだろ？！・・・

認めようが認めまいがあいつらが姉弟であるという事実は変わらない

まあ、実際はどうだかわからないがな

「いきなり何しやがるー！」

「ふん……」

いきなりの平手打ちに呆然としていた一夏だがわれに返るとボーテヴィットヒに食つて掛かるが当の本人は興味もないといった風で流す

完全に気まずい空気がクラスに漂う
その空気を無理やり変えたのはやはり

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第一グラウンドに集合。今日は一組と二組でHR模擬戦闘を行う。解散！」

織斑先生だった

さすがの影響力だ

あの完全に気まずい空気の中でも織斑先生が発言すれば全員の意識が織斑先生に向く

さて、HRも終わったことだしグラウンドにでも向かいますかね～
次の授業はEISの模擬戦闘とのことだから一応出ておくか

一夏はどうやら織斑先生よりデュノアの世話を頼まれてたようだ

教室を出る際

「おい、織斑と霧生」

と俺も呼ばれていた気がするがめんどうなのでスルーした

いや、だつてデュノアは完全に”女”だからな

男にしては骨格が細すぎる

それに本当に男ならもつと大々的に報道をされているはず

それなのに一切の情報が公開されることはなくここに入学してきた

しかもあの「デュノア社の社長の娘」という話

あまりにも展開ができるまでいる

今イグニッションプランからもれて完全に落ち日の「デュノア社
そここの息子がエスを偶然にも動かせて国家代表候補生になる?

そんな偶然できすぎている

資料だけでは判断がつかなかつたため保留にしていたが
今日見て確信した

シャルル・デュノアは”女”だ

おおかた一夏の白式、俺の鋼のデータを盗むのが目的だらう
そんな人物の世話をするのはごめんこつむる

わざわざ敵になる人間の世話をするのは意味がないからな
恩を売れるかもしけないがそんなことで自由なりするような人間な
らばこんな真似はしないはず

さらにもしなんらかの弱みを握られての犯行だとすればさらに厄介だ
どんなことをしても目的を果たそうとするからな
ま、こうのは一夏に押し付けるの限る

あいつならなんかの拍子に正体をじつてそのままフラグ立てそうだ
からな

いや。別にその方が面白やうだからとかが本音ではないぞ？

とりあえず保険としてシャルル・デュノアの経歴を樋無に調べさせておくか

自分で調べてもいいんだが面倒だからな

さて場所は変わって今俺がいるのは第一グラウンド
時間はすでに授業開始2分前

だがそこに一夏とテュノアの姿はなかった
おおかた女子に絡まれたか何かして時間がかかっているのだろう
俺はビリビリしているのかって？

それは簡単な話

俺はいつも制服の下にエスースーツを着ているので着替える必要がないのだ

制服はそちらへんの木の陰にでも置いておけば問題ない
だれも盗みはしないだろうし盗まれても困らないし

・・・といふか盗めないだらつ

俺の制服は特別で生地の中に発信機がつけられている

それはとても小型で俺の専用端末ですぐに場所を特定できる

なんかやりすぐな感じがするがこれでも足りないくらいなのだがなぜなら俺は自分でもあまり言いたくはないがこのE.S.一ついではおそらく世界で1・2を争うほどの技術を持っている人間だ

それゆえに誘拐などの危険があるのだ

以前も一度どこのくず集団が俺を拉致しよつとしたことがあったまあ、返り討ちにしたが

いつておぐが俺は技術者だが別に運動神経が悪いわけではない

さて、いろいろと話がそれたが今は授業開始一分前だ

いまだ一人の姿はない

二人が姿を現したのは授業開始5分後だった

当然のことだが一人は織斑先生の出席簿アタックを受ける

「遅い！」

「バシンツ！バシンツ！

「つ！……すいません」

「早く並べ。授業が始まらない」

二人はしょんぼりした様子で列に並ぶ
デュノアは転校初日から怒られたので一夏よりもテンションは下が
つているようだ

「あら一夏さん、随分遅かつたですわね」

遅れてきた織斑に対しオルゴットはからかうように声をかける
「スーツを着るだけなのに、どうしてこんなに時間がかかるのです
か？」

ちなみにIISスーツ。当たり前だがIISに乗れるのは例外である俺
と一夏を除き女性のみ。つまりスーツも女性用のみしか必要が無い
だから普通のIISスーツは水着…まあ所詮スク水に近く、肌の露出
が多い。でもIISにはシールドバリアー及び絶対防御があるので、
スーツの面積は少なくても何の問題もない

それでも、IISスーツにも通常の拳銃の小口径弾を防ぐ（衝撃は通
る）くらいの防御力はある
よつは体のいい防護服の役目を果たしてくれるのだ

なにが言いたいのかと云ふと学校にいるときはIISスーツはずつと
きていてもいい

とかそのほうが都合がいいのだということだ

「道が混んでたんだよ」

「ウソおっしゃい。いつも間に合ひくせ」

一夏の返事にたいしてビックリか遂げのある返事をするオルコット

ちなみにオルコットには一夏がフラグを立てている

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようです
から？ そうでないと一円続けて女性からはたかれたりしませんわ
よね」

「なに？ アンタまたなんかやつたの？」

その発言に後ろから鳳が話に参加していく
といつかふたりともそろそろやめないと・・・

「一夏の一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？ 一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

いやいや君たち後ろ見たほうがいいよ

「安心しろ。馬鹿は私の前にいる」

ほら、後ろに鬼斑先生がいるよ

バシバシーン！

青空に出席簿の音が響いた

ご愁傷様です

金と銀の転校生（後書き）

次の更新は一週間後です

激突する鋼と疾風（前書き）

なんか完成したので更新しておきます

最近はめっきり感想もへり評価もなかなかもらえないで若干さびしいですね

見返すためにも更新がんばりますかね

・・・べつにテストがいろいろな意味で終わつたから現実逃避しているわけではないです、きっと

激突する鋼と疾風

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「「「はーーー」」」

織斑先生の言葉にみんなが返事をする

今は一クラス合同であるためいつもよりも声量が大きい

ああ・・・耳痛いな

ちなみにさつきおもいつきりたたかれた一人はと、

「くわーーー。何かといふとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

一人とも涙目で叩かれたところを押さえて、鈴に至つては呪詛をつぶやくように一夏の名前をつぶやいている

完全に自業自得だらうなのだがあの出席簿の威力はすさまじいのだ

ろう

俺はじめんだね

「では、今日は戦闘を実演してもいいわ。ひみつ部室に溢れんばかりの十代女子もいることだしな。鳳！ オルコット！」

「ビ、ビヒしてわたくしまで…」

オルコットが不満の声を上げる

いい加減学園しようよ

この人に反論は意味ないよ

なんせ人のいうことを聞かないからな

まあ、いいやつだったよ

・・・ふるこなこのねた

「専用機持ちはすぐに始めるんだ。いいから前に出る

「だからってビヒしてわたくしが……」

「一夏のせになのになんアタシが……」

「お前、ビヒしてやる氣を出す
あこつてことじりをを見せられ
るだ？」「

ああ、なるほど

一夏をだしに使うわけですね

わかります

「やはりこにはイギリスの代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

一人は織斑先生の言葉にまんまとうまく乗せられる

・・・ほんと単純なやつらだなおい

「それで、相手はどうぢら？ わたくしは鈴さんとでも構いませんが」

「ふふん。じつちの合図。返り討りよ

一人はすでに臨戦態勢にはじつてお互にやれやれを出している

かじこはおひつけよ・・・

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は

キィイイイ・・・・・

空気を切り裂く音

そして聞こえてくる聞きなれた声

「ああああーっ！ び、びこてくださこーっ！」

一夏に向かう、見覚えのありすぎる姿

ドカーン！

一夏はからうじて白式を展開することに成功したが、ぶつかってき
た影と一緒に数メートル「ぐるぐると転がる

土煙が晴れ、そこにいたのは

我がクラスの副担任山田先生

そして一夏は、山田先生のエスースでより強調されたその豊満な
胸を驚掴みしていた

なるほど

これが俗に言つ「ラッキースケベ」というやつか

それにもしても一夏はビデオもそうこうしたスキルが高いな
気がついたらフラグ立てるしこういったように何かと男子からす
ればうらやましい状況に陥るし

まあ、個人的には別にどうでもいいわけだが

ビショーン！

一夏に向けて突如ビームが発射されるがそれをビを背を反らせてか
わす一夏

「ホホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

ガシーン

両手に持つた双天牙月を連結。両刃の青龍刀にするとそれをフルスイングで投げる

「うおおおおおっ！？」

それをもう一度なげぞって交わす一夏
だが青龍刀はブーメランの特性を持つた武器
つまりは戻つてくるのだ

かわすときに仰向けに倒れた回避不能の一夏に向かつて双天牙月が
迫る

「はっ！」

ドンドンッ！

銃声が響く

やつたのは山田先生

いつものほわほわした雰囲気から一転、目つきも鋭くなつて、上半身だけを起こした状態で、双天牙月を射撃

その軌道を逸らした

それたそれは一夏にあたることなく地面にさせたる

「山田先生はもともと日本代表候補生だ、これくらいはぞうせもな
い」

「結局候補生ぢまつでしたけどね」

山田先生の射撃の技術に驚いている一同に対して織斑先生は山田先生がもと代表候補生であったことをばらし本人はすこしテレながらいう

ちなみに俺は知っていたので特に驚いてはいなかつた
情報源はあの人たらしな俺の幼馴染である

個人的に言わせてもらつなら山田先生の射撃の腕自体はオルコットと大差ないようと思える

オルコットになくて山田先生にあるのはおそらく”経験”と”状況判断能力”だろう

鳳にかんしてはデータがないのによくわからん

対抗戦のときも試合じたいは特に気にしていなかつたのでよく覚えていない

まあ興味もないのだが

ドオオオオッソー！ × 2

お、どうやら模擬戦は終わつたみたいだな

結果は言わずもがな

山田先生の圧勝のようだ

ちなみに試合内容はまったく見ていなかつた
なら、なぜ試合内容がわかつたのかといふと・・・

「くつ、くつ……。まさかこのわたくしが…」

「あ、アンタねえ、何面白こよつに回避先読まれてんのよ…」

「り、鈴さん」Jモー無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないの
ですわ!」

撃墜された一人が負けた原因をお互い擦り付け合つてゐるからだ
普通に善戦して負けたのならこつはならないだらう

二人は腐つても代表候補生

その二人がこうなるといつことはよほどひどこ試合内容だったとい
うことが推測できる

代表候補生はプライド高いからな~

・・・簪はどうだか知らないが

「さて、これで諸君にも教員の実力は理解できただろう。以後は敬
意を持つて接するよ」

織斑先生がざわついた空氣をしめる

このクラスは山田先生をなめている節があるからな
まあそれは本人に問題があるわけだが・・・

織斑先生はこれが狙いだつたようだ

おそらく今回の模擬戦に狙いは I.S 戰闘の実演だけではなく調子に
のつて専用機持ちに対する牽制
学園の教師を見せ付けることだろう

実はこの学園にいる教師のほとんどが過去に候補生だった者で占め
られている

そのため実のところこの学園の教師の実力はそれなりに高い

それを生徒に自覚させることが今回の目的

やれやれ、やつてくれるね

「さて、模擬戦が思つたよりも早く終わつたからな」「うう……」
そこ、静かにしろ!」

「「はい・・・」

楽勝と高をくくつて臨んだだけに一人の落ち込み方がす”い

「よし、ではデュノアにも模擬戦をしてもらつとするか

織斑先生は急にそう言つてきた
つか転校そぞうそに模擬戦やらせるんすか・・・しかもいやな予感
するんすけど

「え！？僕ですか！？」

「そうだ。転校生の実力を見ておきたい。相手はそうだな、霧生お前がしる」

いやな予感的中

「俺ですか・・・まあいいですけど」

ま、ここで反論して逃げることもできるんだけど別にいいか面倒ではあるが一応デュノアの実力をじかにみるいい機会ではある

こいつと敵対する可能性もあるしなデータは大いに越したことはないだろ？

「デュノアもいいな？」

「は、はい！」

さてさて、じゃ久しぶりの戦闘
適度にやりますかね～

今俺は空中でデュノアと向き合っている
お互い当然専用機を装備している状態である

デュノアの機体は「ラファール・リヴィアイブカスタム」
第一世代のラファールのカスタム機である

この機体は第一世代機のなかでもなかなかに優秀な機体だからな
とはいえ本音ほどの実力はないだろう
ま、悔りは禁物だがとりたてて騒ぐ相手でもないだろう

『では、お互い準備はいいな』

「はい」

「いつでも」

『では、模擬戦開始!』

織斑先生の開始の宣言がくだる
お互い最初は様子見

互いに射撃で牽制しつつ距離をとる

デュノアはアサルトライフルによる射撃

俺は守護領域を開拓しつつのレールガンによる射撃

こういううちました戦いは向こうに分がある

俺の鋼の武装はどれも長距離からの一撃による広域殲滅系

つまりは発射するのに必ず隙ができてしまう

しかしデュノアの場合は火力こそ低いがリヴァイブには多種多様な
射撃武器がある

それを乱射することでこちらに砲撃の隙をあたえない

ライフルである以上とうぜん玉切れが存在するのだがそれを補つて
いるのはデュノアの”ラピッドスイッチ”という技術だ

本音も使うそれはリヴァイブの火力不足を補つてあまりある

正直いやになるな・・・

とはいっても絶対の壁である守護領域がある
つまりお互いお互い有効打が与えられないものである

今は模擬戦開始から20分経過した
しかしお互いのシールドエネルギーは削れていな
だが戦況は圧倒的に傾いていた

「はあ、はあ、なんでそれだけ当てるのに、破れないのかな、そ
の壁」

デュノアはかなり息切れしながら守護領域の硬さにあきれる

「その程度の火力じゃ何発当たるがこの守護領域は破れないぞ。
なんせ世界最高硬度だからな」

俺はそれに対しても当たり前のよつて自身の壁の硬さにひびいてあかす

「それじゃあ、いくらの距離から撃つても意味がないんだ」

「ま、そういうことになるな」

ちなみに今は戦闘中だ

本来ならこうして会話することなどないのだがお互いこの状況では
決着がつかないことを理解しているしました、会話の最中に奇襲しても意味がないことを理解しているため会話を続ける

「で、エリクスのまま続けても意味がないと思つが」

「……やつでもないよ」

俺の言葉に対しても「テュノアは少し考えてからそれを否定する

「ほひへ、」の壁を破れる武装がそつちにあるのかな？」

探るように俺は聞く

「テュノアの機体には本来ならありえないほどの武器がインストールされていた

おそらくは拡張領域を増やしているのだ」

「こちらもまだ全武装を把握できていない以上探しをいれているのだ

「まあね。ひとつだけ、あるよ」

俺の問いに対しても「テュノアは肯定をもって答える

「ふへん、でももしそうなら最初から使えばいいと思ひよ」

俺は思つてこじを口にする

「そう、もし本当にあるのならばさくべきではないし最初から使つべきはつたりとは思えないが実のところはわからぬ」

「切り札、だからね」

少しいいこくそに答える「テュノア

「切り札、ね。じゃ見せてみなよ。その切り札」

俺は挑発するべくさりと言葉を続ける

「その切り札が無力な物だつてことがわかるからさ」

そして最後にこいつ締めくくる

「俺はここから動かないことを約束しよう。存分にためすといよ

さて、のつてくるかな?

のつてきてもいいしのつてこなくともいい

切り札というそれがどこまでのものなのか
見ればいいけど見れなくとも問題はない

どちらに転んでもこの守護領域が破れることはないだらうからな

「そう・・・後悔しないでね!」

そういうとデュノアは手に持っていた射撃武器をしまつと俺に向か
つて突っ込んでくる

そして俺の目の前で止まるどデュノアの盾の装甲が飛び、中から

六十九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻グレー・スケール』通称
『盾殺しシールド・ピアース』

一発を撃ちこみ、終わりではない。

灰色の鱗殻はリボルバー機構。つまり連射可能
ズガンツ！ズガンツ！ズガンツ！

計3発が俺の鋼の守護領域に炸裂する

「これは第一世代型最強の攻撃力を持つた装備
さすがにこれを食らえば破れるだらうと確信する」テュノア
だが・・・

「なかなかの威力ではあるけど・・・全然足らないよ」

守護領域は破れることはなかつた
それもそのはず

この守護領域はただの壁ではなく凡の演算により成り立つ壁
それを破るには第二世代の火力では足りつむはずがない

「そ、そんな・・・」

自身の切り札を使つても倒せないことに言葉を失う『テュノア
だがそれは致命的な隙となつた

「じゃ、終わらうか」

そういうと俺は両肩からハドロン砲を『テュノア』めがけて発射する
本来なら長距離武器であるそれを至近距離からもろに受ける『テュノア』

とうぜんシールドエネルギーが残るばずもなく
そのまま地上に向かつて激突

絶対防御により怪我はしていないうが相当な衝撃がかかつたの
だらう

『テュノアはそのまま気絶したようだ

』ナージまで一勝者 霧生凪一』

レーヴィーして模擬戦は俺の勝利で終わつた

面倒ではあつたがデータは取れてしまふよしこう

敵を知り己を知れば百戦危うからず（前書き）

タイトルに深い意味はないです

そして感想がほしい今日この頃です

敵を知り己を知れば百戦危うからず

あの模擬戦のあと俺はすぐに授業を抜けてきていた
理由は今回の模擬戦で得られたデータの整理と検証のためである

・・・ところは表向きの理由で本当はすこし疲れたからである

凪の機体”鋼”の絶対守護領域は凪本人による直接演算により展開
されている

そのためいくら計算に慣れていても、いくら相手の武器の威力が低
くても

常時全力で脳を使えば疲労はするのだ

しかも今回はデータ収集のためにあえてすぐにかたをつけずに長引
かせていたためいつもよりも脳にかかる負荷は大きかつた

そう、普通に先ほどの模擬戦を見ているものなら機体相性の関係で
勝負が長引いたと思うだろう

それはひとえに凪の実力を正確に知っているものがいなかつたから
である

あの場には本音もいたが彼女も凪の実力を正確には知らない

知っているのは生徒会長である楯無だけである

別に隠しているわけではないのだが凪自身がいつもなかなか戦闘に
自ら出てこないため実力をはかる機会がないのである

ではなぜ楯無が知っているのかということになる

しかしその理由もべつに簪や本音より特別扱いしているわけではなく単にそういう機会が必然的に多かつたのがりゆうである

楯無の専用機である”ミステリアスレディ”の整備はいま凪が行っている

しかし凪はミステリアスレディをさらに発展させるべく自身が考えた新しいシステムや武装をミステリアスレディに加えているのであるそのため必然的に模擬戦により能力を試さなければならず、凪は完成していない技術を他人に知られるのを快く思っていないため自らその模擬戦の相手を務めている

それにより楯無は凪の実力をしつっているのである

話がそれたがつまるところ先ほどの模擬戦では凪はこれっぽっちも実力を出してはいなかつたのである

確かに機体相性はそこまでよくはなかつたがその気になれば超高速移動により距離をとり層転移砲による広域殲滅でかたをつけたをつけることができたのである

凪の機体にはI-Sのハイパーセンサーでも目視でも姿を捉えられなくする特殊な技術が使われている

これを使わなかつたことからも凪の手抜きぶりがわかるだろう

さていろいろといったが今凪はいつも自分が使つてゐる整備室・・・
ではなく生徒会室にいた
本当は整備室に行こうとしたのだがそこに突如

「あれ、なつちゃん？今はまだ授業中よ？そんないけない子にはお姉さんか個人授業をしてあげなくちゃね」「

などとよくわからないことをいわれて生徒会室に連行されたためである
といつかなぜ権無も授業中なのにそこらへんをうひついているのか
といつのをいつたら負けな
気がする

と、そんな感じで今俺は生徒会室に備えてけられ正在のソフアードの
上で今回の模擬戦のデータを眺めていた

今回の戦闘によりデュノアの実力と専用機の能力の詳細なデータが
取れた

もちろんデュノアが本気でなかつたという可能性も考えられるが対
戦してみてそれないと俺は核心していた

あのデュノアは正直自分を隠したり偽つたりするのが苦手な人間だ
それが俺が模擬戦を通して感じたデュノアの本質であった

根拠などない

でも俺はそうかんじたのだ

研究者、開発者としてこいついう根拠のない理由で行動するのはあま
りほめられたことではないのだが俺は自分の勘などを信じている

そんなわけでこれでもしデュノアと正面から激突することになつても
問題はないだろう

しかしそわからんな

なぜあんないい子がこんなスペイまがいの行動をとるのだろうか
もちろんまだスペイと決まつたわけではない

しかしながら今回の模擬戦中あいつがこちらの武装データなどを記録していたのを俺は見逃していなかつた

だからこそスパイだと確信を持っていえる

しかし彼女、いや表向きには彼だが、がこんな行動をするのか疑問が残る

デュノア社のホームページにはシャルル・デュノアのこれまでの経歴が載っていた

しかしそれはどれもありえなく、また都合がよすぎた

そして俺はこの経歴の書き方に覚えがあつた

そう、これは国や企業がある人物に経歴を捏造するときによく使つ方式だつた

これから察するにデュノアは愛人かなにかの子供で歓迎されではないのではないかということだ

もし本当に実の子ならばこのような扱いはしないだろう

完全に女である彼女をまるで道具の名前などを変えるかのように経歴を抹消し偽造し、名前を変え、ここに送り込んでくる

こんなことをすることは思えない

そして彼女がすんでこんなことをするとも思えない

まあ、すべて推測でしかないがな

とりあえずは様子見するしかないか
もしスペイならばからならずデータを盗むに俺に直接接觸してくるはず
ならばそこで確たる証拠を押さえればいい

それまではいまの状態を維持するしかないか・・・

と、そこまで考えて俺がふと顔を上げるとなぜか俺の田の前に、それも超至近距離に楯無の顔があつた

「何をしてるんだ、楯無？」

俺はとりあえず聞いてみることにした
楯無はすこしうねた感じでそれに答えた

「もう、せっかく後も少しどキスできそつだつたのにー！」

私不機嫌ですとこつ感じで答える楯無

「いや、勝手にそんなことするなよ。それに俺はまだ誰と付き合つ
のかも決めてないぞ」

「だからじりじりー」「うして誘惑すればいざれなつちやんの心は私色
にそそ」「染まらないからな「もう！最後まで言わせてよー。」

俺はしようもなくなりそうなので楯無の言葉を途中でせきりた
もうなつているのかもしれないが

「ま、それはいいとして、頼んでいた件はどうなってる?」

「ああ、あの転校生の詳細な個人データだったわね?」

「ああ、特に家族環境について詳細に頼む」

「ええ、わかつたわ」

そういうと樋無は調べてきた転校生のデータ
正確にはシャルル・デュノアのデータについて話し始めた
それをまとめると「

シャルル・デュノアは偽名である
本名はシャルロット・デュノア

家族は母と父

父はシリル・デュノア

母の名前は不明

といつものだつた

「思つたより少ないな

俺はすこし落胆しながら言つ
正直あまり詳しくはわかつていないので
本名が割れたところで意味は薄い

「仕方ないじゃない、どうもあの子データ 자체が存在しないみたいなのよ」

「存在しないか・・・意図的に消したのかそれとも作ってすらいないのか」

「その代りかでしようね。じゃあ今度はビューティフルでいいわ

すこし疲れたよう言つ楯無

実際そこまで確信にせまるような情報はなかったとはいえ彼女はこの学園の生徒会長で暗部の長でもあるつまりそこまで暇ではないのだ
そんな中でも夙から頼みをきき、情報を集めたのだからさすがといえるあたり

・・・まあ、そのため生徒会のほうをおろそかにしていたため仕事がたまり虚に雷を落とされるのだがそこは割愛しよう

「ついで、私のヒーローなつてるのかしら?」

自分のHSの状況を尋ねる楯無
じつは今彼女の専用機は夙による整備、改良を受けておりいま手元にはない

これは国家代表としてはかなりまずい状況なだが整備を担当しているのが霧生夙といういうならばHS界の帝王ともいえる人物であ

るためロシア本国も強くいえないようだ

「こじでその霧生凪についておさらいするが、凪はISをいまの第三世代に押し上げた功労者である

今までどの国が開発しようとしてもできなかつたものを開発し、その後も、慣性停止結界を開発したのも実はこの霧生凪であるといわれている

公式ではある国の開発機関が開発したとされているがその機関はどんな方法を持つても情報を得ることができずまた存在も確認されていない

ゆえにイメージインターフェースの開発者でありながらなかなか表に出でこない霧生凪が開発したものではないかという説が有力になつており、またそれは事実でもある

と、そんなわけで霧生凪はIS界において篠ノ之束と並ぶほどの重要人物なのである

しかしながらやはり表舞台に顔を出してこないため世間一般には認知されていない

「一度完全にばらしてから再構成してゐるよ。今のところの進行状況はまだ二割つてここだね～新しく装備とシステムを追加したからなかなか進まなくてね」

苦笑しながら楯無の間に答える凪

それに対しても楯無は凪の発言のなかの新装備、システムといふのに

反応した

「新しくなにかつたんだ？」で、何をつけてくれたのかな？」？

「まだ未完成だから今は教えないよ」

若干というか完全に誘惑するかのような体勢で凪に質問する楯無だが、凪はそれをあっさりと切り捨てる

「え～～いいじゃない教えてくれたも！」

む～私不機嫌ですという感じで言う楯無

ひりげられた扇子には”不機嫌！！”と達筆で書かれていた

・・・いつも思うのだがあの文字いちいち楯無本人が書いているの
だろうか

だとしたら相当に無駄な時間を使っているような気がする

「俺は未完成なものを人に見せるのあまり好きじゃないんだよ。無
様だからね」

凪は自分の開発したものに対して妥協は絶対にしない

自分が求めた水準に達しなければそれがたとえ完成したとしても破
壊するほどである

ちなみにそれで言つと今の鋼や紅蓮も廻の臨んだ水準にはない
しかしながら少しこまつたことにあの機体は操縦者のデータがなけ
れば完成しない

そのため簪には未完成な状態で一度戦闘をさせている
それ自体は別段おかしなことではない

問題はその後だ

戦闘を終えたあともう一度紅蓮を調べたところあの機体はもういち
から介人ができなくなつていたのだ
あの機体には自己進化開発を行う能力をつけてある
しかしそれはあくまでも戦闘においてより操縦者に令わせるために
つけた程度の機能である
それがふたを開ければこのとおり

おそらくは簪のために自分で進化すると決めたのだろう
自分の主のために自分の牙は自分で研ぐと

まあ、中枢をいじれなくなつたとはいへ飛行ユニットなど外付けの
物はいじれるため今俺が紅蓮にできるのは一刻も早く”エナジーウ
イング”を装備せることぐらである

あとは簪の望む形に皿凸進化していくだらう
ま、そうやっても元よりも性能が落ちることだけはないから問題は
ないだらう

若干開発者としてはさびしい部分もあるがあればあくまでも簪の専
用機だからな

それに”鋼”も整備しないといけないしな

ちなみに鋼のほうはとこつと最近どひもじひに接触しようとして

いる節がある

装備するときに少しつもとは違う違和感を感じる自分以外の他人を近くに感じるような違和感だ

IISには意思がある

これは教科書などにも載っているがなぜ意思があるのかは載っていない
まあ、わからないことは載せられないそもそも確たる証拠はない
わけだしな

俺は解析を進めたところ人と同じ知能を有していたことからおそらくは人工知能なのだと推測したが残念なことにそれを裏付けるための解析はできていない

できたのはその人間と同じ知能を有している
もつと正確に言えば人間と同じ思考波形を見つけたといったところ
だが

まあ、人間そのものであるといつ可能性もあるのだが・・・ないな
そんな方法があるのなら教えてほしいものだ

まあ今はこれに関してもこちらからできることは少ない
いくらIISの本質がよそくできたとはいえ解析ができているわけではない

完全なるブラックボックス

藪をつついて蛇が出るくらいならまだかわいいが、アナコンダクラスマの大蛇が出てきてはたまたものではない
解析はしてみたが今感じている違和感が解決するまでは危険であ

ると判断して今は得になにもしていない

「ふ～ん、まあこなでできるのを待つとして」

そこで一度樋無は言葉を切り生徒会室にある時計を見て時間を確認する

今は12時13分

昼飯にはいに時間であった

「わらわお昼にしない？おね～ちゃんおなかすいたわ

「それもやうだな。込むのもあれだしそうひごくとするか

そういうながら座っていたソファーから立ち上がる凧

樋無も生徒会長のいすから立ち上がるとかなり自然な動作で凧の腕に抱きつくる

「・・・なぜ？」

「いいじゃない。淑女をエスコートするのは男性の義務なのよ？」

何食わぬ顔でそんなことをいう樋無に凧はあきれながらもおそらくなにをとってもむだなのだとわざとる

「はあ・・・わかりましたよ。お嬢様？」

凧はそういうと樋無を腕に装備した状態で学食に向かっていった
その途中で当然ながらほかの生徒に見つかり

「生徒会長に彼氏現るー？」

「相手はあの男性操縦者」

などと騒がれそれを聞きつけた簪と本音は楯無とすさまじい争いを繰り広げていた

そんな三人をみながら凧が

『こんなにも俺を思ってくれる人がいるなんてな・・・』

と少しうれしそうにしていたのは本人しか知らない

敵を知り己を知れば百戦危うからず（後書き）

次回はおやじく遅くなると思こます

再再試 & 補講・・・

黒の影（前書き）

今年最後の更新になります

年明けに学力到達度試験があるためその勉強に移ります

このままだとリアル留年なので・・・

なにとぞご理解をお願いします

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないんだよ」

「そ、そうなのか？一応わかつてこりつもりだつたんだが・・・」

シャルル、いやシャルロット・デュノアが転校してきてから最初の

土曜日

場所は第三アリーナ

ここで一夏とデュノアは土曜にもかかわらずE.Sの訓練をしていた基本的に土曜日といつのは世間一般的な観点から見れば学校は休みの日である

しかしここE.S学園では土曜日にもかかわらず授業が存在するとはいってもあるのは午前中だけで、午後からは完全に自由

なのでほとんどの学生は午前中に学習した内容をアリーナなどで試したり図書館などで復習したりなどと土曜日は過ごすわけである

ここにひとつのさらいするがここ、E.S学園には第一世代型E.S打鉄、ラファールがある

とうせんほとんどの学生は専用機を持っていないので実習いがいの時間に個人的に使うには手続きをしなければならない

しかしながら量産機とはいえ数には限りがあり、また風がその貴重な量産機を2機もらつているためいま学園にあるE.Sの数は少なくなっている

なにを言いたいのかといつと今アリーナで訓練できるものはその高い倍率のE.Sを持っているもの

つまりは専用機持ちがほとんどであることにとどまっている

「」で今アリーナにいる人物について触れてみよう

今ここ第三アリーナには専用機持ちが3人と量産機使いが2人いる
その専用機持ちとは俺霧生凪、織斑一夏、シャルル・デュノアの3人
対する量産機使いは名前も知らない先輩である

さて、もぐるが今俺は一夏たちの訓練、もとい一夏いじめに参加している

「理解できているならこんな結果にはならないわ。どうせなんとな
くなんだろ?」

「一応は理解してるので!」

「一応、じゃダメだろ? 言つておくが知っているのと理解している
のは違うからな?」

「うう・・・そう言われるとな・・・」

「そうだね。知識としては知つてはいるって感じかな。さつき僕と戦
つたときもほとんど間合いで詰められなかつたし・・・」

俺の発言に同意するデュノア

この発言からわかるとは思うが先ほど一夏はデュノアと模擬戦をした
結果はいつももなく一夏の惨敗

正直ひどいものだった

ただ突っ込む一夏に対してもデュノアもマシンガンによるぱり撒き打
ちをしていただけ

無理に突っ込もうとはせずとりあえずは距離をとひつとする一夏に

たいしてアサルトライフルで追撃をする

そしてやけになり瞬時加速で突っ込みグレネードでくのという実にシンプルな戦いだった

「・・・確かに。瞬時加速も読まれてたしな・・・」

「一夏のHISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ」

「感覚でわかつた氣になるからああいつ結果になるんだ。だいたい近接武器しかないので距離をとつてどうする。自分から攻撃しろといつているようなものだぞ」

「おい・・・それじゃ俺どうあるんだ?」

「なに」とも実践してみるのが一番だ。物分りがいいやつならともかく悪いお前は体で覚えるしかない」

「・・・やっぱ最後にはやうなるのか・・・とか物分りが悪いって言つたな!?」

「事実だろう?..」

「知識として知つておくのは大切な事だけど、やっぱ実際にやっていくのも大切な事だと僕は思つよ」

織斑の戦闘にだめだしをしつつ俺はとりあえずは実際に遭つてみるよう進める
デュノアもそれに同意する

「……せういえばや、じうじて俺の瞬時加速の軌道をシャルルは
読めていたんだ？」

「それはね、瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測
で攻撃できちやうからなんだよ」

「なるほど、イノシシみたいなもんか」

自分で言つていて悲しくならないか？

とこつよつも一夏のだしごころが悪いだけなんだがな

「そもそもマシンガンといつのはある程度来る場所さえわかればそ
こりへんにぱら撒くだけで当てることができるんだ。早い話軌道予
測をされるようなものをタイミングを計りず使つからお前は馬鹿な
んだよ」

「辛辣だなお……」

「俺は事実しか言わないからな」

ちなみにここのだけの話

瞬時加速中に方向を変えるのは不可能ではない

しかし世界中探してもそんなことをやるやつはない

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方が
いいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の
場合骨折するやうと思つ」

そう

空気抵抗などの関係で急に向きを変えることは肉体への負担を

強めるのだ

わかりやすく言つと時速100キロで走る車を急に90度方向転換させるよつなものである
早いはなしミンチになる

ISにはそのためのPHOがついているがそれに限界はある

「・・・それこそ隙を作り出しても一撃が重要なんだが・・・
武装がないからな」

「夏のエリテは牽制になるよつな武装が一つもない

あるいはエネルギー無効化攻撃を可能とする雪片一型のみ
しかもその雪片も自身のシールドエネルギーを消費する諸刃の剣
正直初心者が操りきれる代物ではない

「せういえば、一夏の由式つて後付装備がないんだよね？」

「それなんだよなあ・・・何回も調べてもらつたんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換が無理なんだ」と

拡張性が無い機体

そういうのは大抵、拡張性を犠牲にして機体性能を上げるかそれだけの武装を持っているかのどちらかになる

一夏には同考ても後者だらつ

あの雪片一型は一つの姉である織斑千冬の使つていた”暮桜”に
あつたものと同じ

しかもあの機体もそれしか武装がない

俺が思うにあの一夏の白式と暮桜を作ったのはおそらく篠ノ之束だ
ろ？
いちおう白式は俺が前いた倉技研が開発したとなつてはいるがそんな
データは見たことがない

あ、ちなみに俺はここに入るときに倉技研から抜けている
かなり面倒だったが完全第三世代完成型のデータを渡すことで黙つ
てもらつた
どんなものを渡したのかは後に語るとして

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使
つていいからだよ」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーと、なんだっけ？」

「文字通り唯一仕様の特殊能力だ。ISと操縦者が最高の相性にな
つた場合に発生する能力。ちなみに基本これは一次移行後から発現
するのが基本だ」

「邱の言うとおり普通は第一形態から発現するんだよ。それでも発
現しない機体の方が圧倒的に多いから。それ以外の特殊能力を複数
の人間が使えるようにしたのが第三世代IS。オルコットさんのブ
ルー・ティアーズと凰さんの衝撃砲がそうだよ」

「なるほど、それで、白式の唯一仕様は零落白夜なのか」

零落白夜、エネルギー性質のものならばすべて無効化・消滅させる
白式の最大能力

しかし発動の代償には自らのシールドエネルギーを削る

そしてこれは俺の絶対守護領域を現在唯一破ることができる武装である

そもそも鋼はそのほとんどがビーム兵器

つまり俺とオルコットは一夏にたいしてかなり相性が悪いのである

「・・・どうにかしてシールドエネルギーを減らさずに零落白夜を使えないかな?」

「そんなことできたらパワーバランスが崩壊するだろ。何事にもそれに伴う代償がある」

そんなチートが許されるのはアニメの中だけだ
あんなものを無制限に使われてはたまつたものでない

「白式は第一形態なのにアビリティーがあるっていうだけでものすごい異常事態だよ。前例がまったくないからね」

「しかもその『零落白夜』って織斑先生の 初代『ブリュンヒルデ』が使っていたISの能力と同じだよね?」

そういうのがおかしいところなのである

唯一仕様はその名のとおり唯一の能力である
それが同じであるなどといつのも前例がない

しかし物事には必ず理由がある

いつかは解明するつもりでいる

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」

「ううん、姉弟だからってだけじゃ理由にならないと懶り。せひきも言つたけど、EVAと操縦者の相性が重要だから、いくら再現しうとしても意図的に出来るものじゃないんだよ」

もしモチベーションが解析できたらおもろくまた世界は変わるんありますな・

「じゃあさっそく射撃武器の練習をしてみよつか。一夏、はい、これ

そつこつてシャルルはまきまで使つていた五五口径アサルトライフル『ヴェント』を一夏に渡した

「あれ、でもほかの人の武装つて使えないんじゃ？」

勉強不足だな一夏・・・

「基本的にはね。でも持ち主が武裝を使用許諾をすれば使えるんだよ

「ちなみにこれも常識だからな?」

「こま発行使用受託を白紙したから試しに撃つてみて」

「えっと、構えはこうでいいのか?」

「あ、もつもつと脇をしめて、そつそつ、で左腕はこうか

かなり自然に織斑に教えていくテュノア

本人もまさか自分が今データを足らでいるとは夢にも思わないだ
ろ？

とこりうか、一夏はどうも人をなかなか疑つてからない
早い話かなり甘い

だが俺は見逃さない

デュノアがこの訓練を始めてから今までの映像を記録していくことを

ちなみに俺が今回参加したのはデュノアを監視するためである

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはISが
自動で相殺するから心配しなくていいよ。センサー・リンクは出
来てる？」

「銃器を使うときのやつだよな？この機体それもないみたいなんだ
よ」

普通近接型ISであっても一応は銃を使うことを考えてこのシステムは搭載されている
しかし白式にはそれがない
完全なる近接ISというわけである
なんというか非常に未完成極まりない機体である

俺なら絶対にこんな機体は作らないな

「ま、それだけ一夏とワンオフアビリティに自身があるんだろ？
俺はとりあえずそう返しておくことにした

その後一夏はデュノアから借りたヴェントを撃つた
それなりに形にはなつていたようだ

俺は狙撃銃などは使わないのでそちらへんはよくわからないのだが
この鋼に搭載されているのはすべて銃の形をとらない遠距離武器なのだ

そもそも威力は強すぎるのに銃で撃つといつことが考えられないの
である

・・・まあそちらへんを可能にするべく今も開発を進めているのだが

と俺がそんなことを考え一夏のヴェントを撃つ音が聞こえるなか急
にアリーナがざわつき始めた

ここで訂正しておくと最初訓練を始めたときは少なかつた人が今は
少し増えていて観客席にも人が増えていた

大方ここで俺たちが訓練しているということを見学に来ているもの
も多いのだろう

「・・・・・」

さて、急にざわつき始めたアリーナ

その中心にいたのはもう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・
ボーデヴィッヒだった

誰とも会話をしない孤高の女子
あまり話しかけたくない雰囲気だし話しかけてほしいとも思つてい
ないだろう

初日にも感じたがこここつは他人を見下してこゆよつである

やれやれ、孤高と孤独は違うんだけどね～

「おー」

I-Sの開放回線で声が飛んでくる

しかし、それは一夏のみに向けられていた

「・・・なんだよ」

一夏はこれに対してもう少し返事をする

転入初日にいきなりはたかれではいつこつ反応になるだらう

「貴様も専用機持ちだそつだな。ならば話が早い。私と戦え」

いきなりの申し出、とこつか命令にそりにこやそつな顔をする一夏

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私はある」

ボーデヴィッシュは一方的にそりにさげる
なんとも自分勝手なことである

「また今度な」

「ふん。ならば 戦わざるを得ない様にしてやるー。」

言うが早いが、ラウラはその漆黒のIS、たしかシュヴァルツェア・レーゲン（Schwarzer Regen 黒い雨といったか、を戦闘状態へシフト

直後、左肩に装備された大型の実弾砲が連續で火を噴いた

「！」

「…」こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね
ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「・・・・・」

いきなりの攻撃に対してもそれを防いだデュノアと、
一夏は二人にかばわれる形となっている

デュノアはヴォントを呼び出しそれを構えながら威嚇しそれとは対照的に、嵐は何事もなかつたかのように平然としていた

「フランスの第一世代」ときで私の前に立ち塞がるとはな。ところ
でそここの貴様、今何をしている」

ボーデヴィッヒは嵐に向けていう
嵐はアリーナを去ろうとしていた

「何つて、帰るだけだ」

嵐はそんなこともわからないのかといいたげに答える

「ほう、実力差を理解し尻尾を巻いて逃げるのか。殊勝なことだな」

それに対してボーグヴィックは馬鹿としたようになつて、
といづか完全に馬鹿にしていた

だが畠はそれを気に留めることもなくその場を立ち去つていった

動かすか箇（前書き）

なぜか書をあがつたので更新しました

できれば感想、評価お願いします

あの後俺はそのままいつも整備室に移動していた
あの時ボーデヴィッシュの攻撃を防いだときに少し違和感を感じたからだ

いつもするわけではないが今までにもああいった状況に対処するために守護領域を緊急展開したことはある

ちなみにこの鋼は武装などを展開しなくても守護領域を展開することができる

普通のISHが可能とする部分展開

それをさらに開発をすると「とで能力だけを展開する」とができるようになったのだ

とはいっても守護領域以外は必然的に部分展開しなければならないのだが

さて、それはおいておくとしてそのときいつもとは違う違和感を感じた

とにかく自分とは違う何かの思考が一瞬は入ったような気がしたのだ
いつも通りに演算をしたはずなのだがいつもよりも展開がわずかではあるが遅れた

そのわずかなタイムラグが普通の不具合とは違ひ自分の思考にノイズが混じったような感じがしたのだ

この鋼にはイメージインターフォースを応用発展させた思考トレスシステムが採用されている

思考トレースシステムとはその名のとおり思考をIFSの動きに転用するシステムのことである

全身装甲である鋼や紅蓮はこのシステムを使用しないと装備などの変更、システムの変更ができないのである

普通の機体で可能な空中ディスプレイを使用しないためである

このシステムを使用することで演算をそのまま入力することができますのでラグが発生することはないのである

しかし今回は途中で一瞬それが乱れたのだ

なのでその原因を発見するためにここに来たのである

それにしても・・・

「なぜここにいるんだ？」

そり、なぜかここには生徒会長である更識楯無があたりまえのよう
にいたのである

ちなみにここに入ったときは間違いなく誰もいなかつた

俺は整備をいろいろのを他人に見られるのが好きではない
整備を見るところとほその仕組みを理解する機会を見せるところ
ことになる

当然それだけで理解できるものはほとんどない

鋼はそれぐらいの能力をもつた機体なのである
しかしながらヒントを『覚える』ことに変わりはない

映像としてそれを記憶されそれがもしもどこかにもれた場合それは
すさまじい損害になる

俺は別に技術提供をするのがいやなわけではない
もしいやならば慣性停止結界などの技術を提供するはずがない
まあ自分であるところことは公表してはいないものの確かに世界に

対して技術提供はしている

ここだけの話錆の守護領域はこの慣性停止結界の応用によるものなのである

もちろんそれだけではないがもしデータを解析し、それを理解することができる人物ならば守護領域を解析することなど造作もないのだろう

早い話俺は自分の意思ではないといひで自分の技術を使われるのが嫌いなのだ

この世界はいつでもギブアンドテイク

それが俺の今まで生きてきての結論

何かを得るために何かを犠牲にしなければならず結果には必ず代償がある

勝手にデータを取られる、応用されることは代償なしに利益を得るということだ

俺はそれが許せない

どんなものでも俺が生み出した技術には代わりがない
それに誇りを持っているのだ

それを汚すところだとだからだ

さうと言えば俺は「国企業に以前してやられたことがある

あれは俺が倉技研に入つて間もないころ

そう、イメージインターフェースを開発しその技術の一部を公開したときの話だ

そのときこういふとあつてね

・・・え？ そのいふって何か？

いや、説明すると長いんだけど早い話そのとき俺が開発を進めていたIFSのデータをそのまま盗まれたんだよ

しかもデータにウイルスのおまけつきでね

そのためその開発は途中で断念することになってしまった

しかもまさこことそのとき盗まれた工事のデータは解析し開発することができれば世界が変わる

そう、俺が今開発を進めている“ナナジーウイング”的プロトデータなのだ

もつと正確に言つならば俺が考えうる限りで最高性能のHSの開発のプロトデータだ

そのスペックは実現できれば簪の紅蓮をもしのぐ性能を誇る

とはいっても原案であり実現可能かどうかは考えていない上、もし仮に作れたとして乗りこなせるものはいないだろう

あれを開発できるものが亡国企業にいるのかはなぞだがいまのところあちりども開発は進んでいないようだ

まあ、開発計画者の俺が難航してこられをそのまま簡単に完成せらるるとは思えないが・・・

ちなみに俺は別にこのことで世界がどうなるかと知ったことではないのだ

はつきりいって俺はそんなことに興味はない
ただ俺は開発者として亡国企業にしてやられたという事実が気に入
らないのだ

だからつぶす

それだけだ

なので整備するときは基本一人でやるのが常である
整備しているときは簪や本音ですら入れたことはない

なので俺の整備を見るのは樋無が初めてというとなる

「あら、さつき普通に入ってきたわよ~。」

俺の問い合わせに対しても当たり前のよう答える樋無
だが本気ではないことがよくわかる

なぜなら樋無の扇子に『隠密行動!』と書いてあったからだ

「はあ、ま見えましたものは仕方ない」

俺はあきらめながら言つ

もちろん見られたくはないがこいつはそんなことではない

「心配しなくても映像は撮つてないし技術を盗む気もないわよ」

「当然だ。というかもしその氣なら俺の前に現れないだろ? しな

技術を盗むのが目的ではないという権無
ではなぜこいつに来たのだろうか?

「こいつは一応生徒会長

仕事がまだまだ残つていて大変だと虚から聞いていたのだが・・・

「当然抜け出しきったのよ!」

扇子には『戦略的撤退』と書いてあつた

とこいつが俺声に出してないのになんて考へてる」と読めたんだ?

「なつちゃん、と私は一心同体だからよ!」

はあ・・・こいつはそういうことを平然で言つんだよな
もちろんうれしくないわけがない

こいつは身内目を抜きにしても相当にかわいいのだろう
恋という感情はよく理解できていない俺ではあるがそういう美的感
覚に疎いわけではない

むしろ人よりもそこには敏感であるといえる

前服を買いにいったら気づいたら2時間以上たつていたことがある
ほどだ

「そういうことを簡単に言づから人たらしつて言われるんだよ」

俺はため息混じりに言づ

こいつは外見がかなりいい

容姿端麗三色兼備というみながうらやむほどのスペックを持つている

そのためHIS学園の生徒からはかなり信頼されているし人気もある
しかしながら教師陣からは信頼はされているものの人気はあまりな
いのである

その原因がこの言動にある

誰に対しても二口二口と接し決して本心を出さない
しかしそれを悟られることがないため周りからは人たらしにしかう
つらない

「こんなことなっちゃんにしか言わないわよ」

「そうですか」

俺は氣のない返事を返した
ここで取り合づと面倒なのだ

「む～わたしひそなんに魅力ない?」

楯無はふてくされながら聞いてくる

「一般的にみて十分魅力的だらつ」

俺は即たり障りのない内容を返す

「なつちやん自身の意見が聞きたいのー。」

楯無はすこし怒ったよひに聞いてくる
“じつやらなんとしても聞きたこよひだ

しかし甘いな

「せりだな、その髪につけている録音機器を！」と破壊するなり答えてやるよ」

やつ、ここはなんとことも俺の口から聞きたかったのだらつ

『かわいい』といつも薬を

しかしそんな手には乗らない

もちろん俺はかわいいと思つ

それを言つのをためらつわけでもないし録音されて困るわけでもない
しかしながらわざわざ乗つてやる必要もないのに乗らないこととした

「えへと、何のことかな～～」

あえて白を切る」とした樋無
しかしその表情はまづつたな～といつ表情をしていた
そしてそれを見逃す俺ではない
だが先ほども言つたように別に困るわけではないのだ

白を切るのならそれでもいい
ただ答えないだけなのだから

「ま、白を切るならそれでもいいよ。じょろく口きかないだけだ
ひ

ここつはたいていこりこりと折れる

今までもううだつた

これからもううであるかは微妙ではあるが試してみる価値はあるだ
ろつ

・・・ちなみに俺は怒つていない

ただなんとなくからかって遊んでみたくなつただけだ

昔の自分では考えられなかつたな～と思つ
誰も信用せず誰も必要としない

だから孤立するしていた

いや、自分からそれを選んでいたのかもしれな

だれも俺を見てくれない

誰もおれ自身を見てはくれない

俺がどんなにがんばっても俺が両親の子供だからと周りには捉えられた

だれも俺の努力を見てくれない

そして両親が死んだら今度は俺の能力しか見てくれない

誰一人として俺を見ててくれた人はいなかつた

今考えると樋無や簪と会えたには幸運だったと思う
人は一人では生きていけない

人は自分以外の他人を認識し必要とすることで生きていいくことがで
きるのだから

さて長くなつたがつまるところ俺は今の日常に満足している

もちろん知識への探究心は費えていないし衰えてもいい

だが今の世界が嫌いではない

以前はすべてを破壊してもいいと思っていた
だがこの世界には大切なものが増えすぎた

俺には大切なものが増えすぎたのだ

だから俺は守りたいと思つ

この日常を、俺の大切なものを

たとえそれと引き換えにすべてを失つことになつたも！…！

・・・なんてシリアスなことは考えてないwww

そこまで深く考えたことは今までない

俺はただなんとなく生きているだけだからね

俺のモットーは”緩やかなる日常”だから

そんなわけで俺はその後も虚が樋無を迎えるまで樋無で遊んだ

この緩やかなる日常が続くことを祈りたいね

私には本当の名前があった

お母さんがつけてくれた本当の名前

私が私であるための最後の絆の証

でも、それを捨てなければお母さんが死んでしまうんだ

だから私はどんなことをしてもお母さんを助ける

たとえその方法が間違っていても、どんない人道的でなかつたとしても
許されないことだとしても

私はそれを選ぶよ

だから霧生君、一夏君

許しは請わないよ

動を出かぬ（後書き）

・・・動を出していくないか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8257x/>

IS-インフィニット・ストラトス-知識を求めるもの

2011年12月20日22時45分発行